
Q、異世界で逆ハーレムは成立するのか？

星野由羽

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Q 異世界で逆ハーレムは成立するのか？

【NZコード】

N7429X

【作者名】

星野由羽

【あらすじ】

Q 異世界で逆ハーレムは成立するのか？

A、無理だろ。無理無理。

あたしはただの乙女ゲーオタクのひきこもり、保崎 秀名。高校に行かずに毎日ひきこもりライフを送っていたら、何と急に異世界に召喚された！？

その理由が「六人の愛しの息子たちに、本当に恋愛を教えてやってくれる」だって。

一応乙女ゲーの達人なので、すぐに元の世界に戻れると思ってけど、なんだかその息子たちがめっちゃ性悪！

女好き、天然悪男、冷血人間 etc.....。

あたし、いつ戻れるのだろうか……。っていうか、本当に戻れるのか……？

第一の問に「何が違うのか？」

ああ、何か違うな。

あたしは、目を覚ます前から、違和感に気が付いていた。
背後でざわめく木々の声、ほっぺたに感じる、葉っぱの冷たい感
触。遠くで鳴く、何かの獣の鳴き声。

あたしは、自問自答してみる。

Q 何が違うのか？

A、世界も、自分も、何もかも。

数時間前

「……っし……」

お菓子の「ごみ袋が散乱している部屋の中で、少女の声は響く。

なんて、かつこいい書き出しで始めてみました。

あたしの名前は保崎ほさき秀名ひなな。男でも女でもとれる名前だけじ、あ
たしは一人称からわかる通り、女だ。

今は引きこもり中。うつとおしい前髪を頭の上でくくり、左右に
たれてくる短めの後ろ髪は、ピン止めでピタッと止める。女子力？
何それ食べ物？ 状態の、思いつきり「腐女子」の高校生でーす。
そんなあたしは、目の前にコンパクトな、年季が入っているゲー
ム機を取り、「男子攻略」中。

画面の向こうには、机が散らばる教室に、うつとりするよつた金
髪を持つた、生徒会長があたしに向かって話しかける。

生徒会長：『俺、生徒会あつたんだけど……何の用？』

話の途中で頭を搔く、リアルぶりだ。

あたしは動搖する様子を見せずに、「彼」に向かつて言葉を投げつける。

ヒイナ：『別に……よつ、用なんてたいそなもののじゃないんだけど、聞きたそだから言つてあげるつー』

ふつ、「彼」のタイプはシンデレキヤラだ。あたしはその役を演じるだけ。

すると、予想通りに顔を赤くし、頬を搔く「彼」。
あたしはその反応にガツッポーズをし、「黙る」のコマンドを選ぶ。

「どんなセリフでも来い……ま、その言葉は決まつてゐるナビ」

あたしが身構えると、思い通りの言葉が返ってきた。

生徒会長：『あのさ……いきなりだけど……ずっと、お前のこと、いいなつて、思つてたんだ……その、つ、付き合つてくれないか…』

…？』

来たーっ！

「全コントローラー よし、このゲーム終わり」

あたしは、画面の向ひつの「彼」に手もくれず、セーブもせず、電源を切つた。

ぱ、と黒い闇が広がる。その画面に、頭がぼやけて、中学校時代のジャージを着たあたしが映つた。

高校に、入学式合わせて三日しか行っていない、ダサいあたし。おしゃれな雑誌なんて買ったことがない、流行に乗り遅れているあたし。恋愛ゲームの達人だけど、実際の恋愛なんてしたことがないあたし。

「……はつ、次のゲーム！ 昨日発売だつた新作の！ やろう、やろう！」

下がつてきたテンションを上げ、パチリ、と電源を入れた、次の瞬間。

ゲーム機の画面が、ぐにゃりと曲がる。

「え？ まさか、パグ？」

叩いてみたが、治る感じはしない。

それどころか、波紋は広がり、ついには気味が悪くて手を放す。しかし、黒い渦は、二次元を超えて、三次元に突入。その黒い渦に、あたしの手が呑み込まれる。

それが、あたしの見た、この世界の最期だった

「つてことは、死んだのかな、あたし」

田を開けずに咳いてみる。

もちろん誰も答えない、と、思ったその時、

「あのー……生きていますかー……？」

おどおどした、腰が低そうな男性の声が聞こえてきた。

第一の問い合わせ「この一人はなんなのか？」

「あの……聞こえていますかー……？」

その声は、徐々に声が低くなつていき、ざつざつ、といつ後退する音も聞こえてきた。

気配からして察するしかないのだが、

「あのあ……お願いですから聞こえていたら返事してえつー。」

ただだ、とこちらに走つてくる音とともに、耳元で怒鳴られる。

「聞いてるわばか野郎ーっ！ 鼓膜敗れるだろーっ！」

あたしもむくつと起き上がり、耳元で怒鳴つてやつた。
ひえつ、と声を上げ、小動物のように縮こまる、例の人物。

「お願いですから、大声を出さないでください……」

ビビりながらひりひりの顔は、結構、

「イケメンだ……」

そう、日本人離れした高い鼻、ややタレ氣味の目、ふんわりとやわらかそうな唇、ふわふわなほっぺ。それらが絶妙なバランスでおかれている。

て、天から舞い降りたエンジェルやーっ！

そう。短めの紙はくるくるこまかれているし、白を基調とした、ナポレオンのような洋服。ほつそりとした手足は、あたしが力を入

れるとすぐに折れそう。

「あの、テイクアウトで！」

- はあ
...
... ?

いきなり怒鳴ったあたしに、はてなマークを出す、エンジエル。
ああ、その困った顔もかわいい……。
あたしが、エンジエルの顔をじとーっと見ていると、後ろからぱ
こつ、となにかで頭を叩かれた。

「いつたー……誰よ、殴つたのはっ！」

あたしが後ろを向くと、そこには、手に凶器を持った、殺人鬼。
ではなく、

「またモヤーっ！？」

黒髪の美少年が立っていた。

エンジェルの子と顔だちはよく似ている。黒髪も、ストレートではなく、毛先が少し、くるっと回っている。釣り目がちな瞳は、闇のような黒。こっちのイケメンは、黒を基調とした、エンジェルと同じつくりの服を着ている。

そんな彼は、あたしを不審そうにじっと見て、じういつた。

「このバス、処刑してもいいか?」

ふざけるなーっ！

「ああもう、やつぱそう来たか、乙女ゲーの定番、冷血人間っ！」

うん、黒髪と来たらそれだよね。……じゃなくて！

「は？ 何が言いたいんだ？ おい、ジエル。この女を連れて行け
そういうわれ、はひつ！？ と肩を震わすエンジェル君。いや、ジ
エル君。
名前もかわいいんだから。

「あの、お兄様……本当に、連れて行くんですか……？」
「そうだ。おい、立て。動けないと、お前はテブでバスと
いつことになるぞ」

そういうながらも、腕を引いてあたしが立つお手伝い。
高感度、二十九。

「早く連れて行くぞ。おう、右のほう持て」
「は、はい」

二人のイケメンに挟まれ、あたしはきれいな緑色の草の上に、赤
い鼻血をまき散らしました……。

Q この二人はなんなのか。

A、この後わかります。

「いやあー、はつはつは。まさか森で倒れてしまひとはね。あつは
つは、はつはー！」

豪快に笑うおじさんの前で、あたしは正座をしています。
下にはふかふかの、赤いカーペット。上にはキラキラのシャンデ
リア。そこには、メイドさんがずらりと一列。ついでに兵隊さんもす
らー。

田の前に座っているおじさんは、豪華な、金色の椅子に足を組ん
で座り、頭には大きな冠。真っ赤なマントがよく目立つ。そして、
服装は、王様風。

いやあ、カボチャパンツはしているおじさん、生きているうつむき
拝見できたよ。よかつたよかつた。

「つじじゃなくてーつ！」

「誰に言つているのかね？」

「違います、違うんですすみませんつー！」

「つむせーよ黙れブス」

あたしの隣に立っている、あの冷血人間が言葉とこづかの矢を放
つ。

クリーンヒット！

胸を抑え、うずくまるあたしに、おじさんは、「コレ、レイ」と、
まつたくどげのない叱り方。

甘やかすなよー！

「つていうか、誰なんですか、あなた。あたし、まつたく状況読
めていないんですけど」

「読めなくて当たり前です」

そういうにてこいつと近づいてきたのは、ピンク色のローラータを着た女性。

……いや、メイド服を着た、女性。
ふりふりのレースは裾だけでなく、様々なとおりに使われており、
ワンポイントの花は、巨大だ。

「あなたはこの世界に召喚されたのですよ、保崎さま」

にこりと笑う、彼女にノックアウト。

おかしいなあ……あたしに百合要素は一切なかつたはずだけど。

「それで……？　あたしは何のためにここに来たんですか？」

他にも聞きたいことはいっぱいあるが、まずはこれが最優先だ。すると、メイドさんに代わって、おじさん、おじさんが、椅子から立ち上がり、大声であたしに言った。

「保崎 秀名。おぬしはこれから、最愛の息子たちのハートをゲットするのだッ！」

……保崎 秀名。なぜか異世界で、逆ハーレムづくりを強制されました……。

第三の問い「ハーレムを作る」とがやめるのか? (前書き)

予想以上の反響に驚きです^ ^
読んでくださつたら、感想と評価をつけていただくと踊ります。画面の前で^ ^

第三の問い「ハーレムを作るのはなぜか？」

Q エリスのハートをゲットし、ハーレムを作れることができるのか？

A、（一番目）ああ、わかりませんねー。

「第一王子のクロード様ですか」

あたしは今、豪華なあるドアの前に、例のメイドさんと一緒に立っています。

紅い、蛇がモチーフのドア。扉口や金やらがたくせん、これでもかとついている。

「……なんで、いつなったんだつけ……そうだ、数分前だ……」

あたしの、現実逃避から成る回想が、始まった。

「え？ なんで逆ハーレム？……？」

思わずつぶやいたけど、それは、おじさんには掴みつかないとした
レーベンにかき消された。

「なんなんですか、父上っ！ 聞いておりませんよー。」

「うん、そりゃそうだよつね。言つてないんだもん」

「言えつづってんだよバカおやじー。なんでこんなちんかいりんこ
恋心抱かなきやいけないんだよー。」

「そうか？ お前にぴったりだとおも……」

「お前にぴったりだよ！ 四十五のひげおやじになあ！」

いきなりの父と息子のけなしあい……つていうかレイさんの一方的な悪口を聞きながら、あたしの頭も混乱。

「えの、あつと、なんであたしを選んだんですか？ 他にもいい人いるじゃないですか。美人さんなんて」「ぐるぐるいますよ」
「そうだ！ 仮にも美人以外の人でも、こいつのレベルはないだろう、こいつは！」

何故に一度言つた！

「ふ。レイは人を見る目がないな。何を隠そうこの秀名さんは！」

お、何々？

「恋愛ゲームの達人なのだ！」
「オタクじゃないですか。ただの」

ふん、あたしはその言葉を何年聞いてきたと思つてゐるのだ！
もうその言葉には慣れっこだもんねー！

「ただのオタクじゃないぞ！ なんと、この人は恋愛経験ゼロだ！」
「言ひな———つ！」

あたしは、おじさんの顔に右ストレーントをお見舞い。
その途端、横にずらーあつと並んだ兵隊さんが、あたしののど元に、長い槍を押さえつける。

ほんの数ミリ動いただけで、あたしののどは確實に切り裂けるだ

ねい。

「……なんのまねですか……」

「それはこちらのセリフじゃないのか」

ちやつ、と槍を、強く押し付けた。

「王になんてことを」

王? この人王なの?

「まあまあ、対していたくないから気にしないでくれ」

赤くなつた頬を抑えながら、一々笑つて言つたじさん。いや、
王。 よゆー やうな口調だが、目は涙がたまつていて、痛そうなのが手

に取るようにわかる。

「…………すみませんでした……」

とつあえず謝つておいて、話の続きを戻る。

「……それで、そのあたしが逆ハーを作る理由は……?」

「そんなの決まつているだろつー。息子が恋愛をしたことがないからだ!—！」

「何がどう決まつているのかわからぬ……。

「とにかくだ。女癖悪いやつもいる、妙な趣味を持っているやつもいる、女嫌いの奴もいる、とにかく恋愛に無縁の奴らがそろつてい

る

ええ。特にレイなんか、逆にきらわれそうですね。

「特定に俺の名前を言つてるのは何か意図的なものか……？」
「そうに決まつているじゃないですか」

バチバチを火花を散らすあたしたちの間に、例のメイドさんが間にに入る。

「まあまあ。とにかく、詳しい質問はあとで、長男、そして第一王子のクロード様にあつてみませんか？」

「回想終了。

短かつた……もう少し現実逃避したい……。

「では、入りましょ！」

メイドさんが、ドアを開けた。
その先には　。

「ほんにちは。君が、秀名ぢやんだね？」

あたしのジャージ姿を目にも驚かない、といふか逆の反応をする、長髪の男性がいた。

あたしは、この人の心も手に入れなくちゃいけないのか……。

第四の問い 「長男登場に、自信はつづのか？」

Q 長男登場に、自信はつづのか？

A、少し……いや、結構、無理。

「秀吉ひやん、よろしくね。僕は長男、そして第一王子のクロードだよ」

にじりと手を差し出していくのは、いかにもキャラそうな、男性。田七十はゆうに超えていくあたりが長身に、甘いマスク。茶色い長髪。

ブラウンを基調とした、例の服を着ている。
いい年して、兄弟そろって色違いの服を着て居るのにツッコミたくなるが、そこはスルーしておこう。

「では、私はこれで」

頭を下げるメイドひやんに、「なりきつてるー」と一聲かけ、クロードさんは、見送る。

あれ？ あたしは遊び人だと思っていたけど、そうでもないのかも。だって、普通は手ぐらい握るキャラが多いのに。
すると、あたしは今、自分が置かれている状況に頭が追いついた。目の前には、男の人。そして、妙に目が付くのは、フカフカなベッド。

どんなに鈍感キャラでも、さすがにこれは気が付くだろう。
その途端、混乱する頭。

いや、待てよ…？ あたしは女だが、バスもあるんだぞ…？

自分が一番わかつているじゃないか！ ありえない、うん、あるいはない。こいつ、いかにもメンクイそうだし。そだそだ、ないない、ないないない。

混乱してきたあたしの方を、ポンとたたくクロードさん。

「何々？ 僕たち、どうすればいいの？」

「お、お話とかでしよう普通は… うん、そうですよお話しまじょうー！」

あたしの熱が入った声に、クロードさんは首をかしげる。

「ベッドで？」

「違うだろぼけーっ！ 初対面の人と話しゃすこよに椅子といつものがあるんだろてめえーっ！ ひと段落飛ばすなバカあーっ！」

落ち着かないあたしの声に、ふつ、と笑うクロードさん。

「椅子、ね。その考えはなかつたわー。僕、初対面の人でもゴーだから

「それはお前だけだーっ！」

ふう、なんか頭も冷えてきた……よし、落ち着こい私。
ふらりふらとおぼつかない足取りで、高価な椅子に近づく。

「お、お話しだね。よし、じゃあやりますか」

「じりと笑う、クロード。

あ、さんつけてないけど、まあいいか。

Q エリ子のハートをゲットし、ハーレムを作れる「」ができるのか？

A、「」の人苦手だから、無理かも……。

「俺の趣味はね」

あたしに質問もしないけど、さつわい話し始めるクロード。
ああ、こここつヤダ……。

「女の子と遊ぶ」とー」

爆弾投げてやるとか?
とは言わずに、とりあえず笑つておいた。
ひきつりだす顔。

「ん? なんか顔面崩壊していなけど、大丈夫かな?」

「」「」と、罪悪感の感じていなさそうな顔で笑う、クロード。
「つづけええー」。

あたしは後ろを向き、思いつきり顔面崩壊 いや、いやな顔をして、心の中のいろいろな感情を吐き出した。

「どうかしたの?」

何も疑つていなさそうな、純粋な目。
「いつ、何歳だよ。っていうか、女遊びが趣味なのに、なんでこいつ、こんな顔ができるわけ?」

「いえ。失礼しました」

あたしは笑つて、背筋を伸ばす。

「ところで、好きなタイプとか、あるんですか？」

あたしが聞くと、

「女の子全面」

と、答えた。

ぶ、ぶつ殺してえーっ。

「女の子って、イイよね。かわいいし、守りたくなるし」

あれ？ ここって、あたしが思つているのより、いいやつなのがも。

そう思つたとたん、

「特に体」

あたしはクロードに顔面パンチをお見舞いし、部屋を後にした。
もはや、田舎者。

第五の問い「次男登場。恋の予感はあるのか?」（前書き）

拍手ページや、いろいろ設置しました
クリックお願いします^ ^

第五の問い合わせ「次男登場。恋の予感はあるのか?」

ふりふりおこつながら部屋から出てきたあたしを見て、例のメイドが、

「やはり、苦手なタイプでしたか……」

と、苦笑い。

あたしはうん、と激しく同意。

「では、次の部屋に行きましょう。次は次男、第二王子のアシル様です」

アシルかー。いい人だつたらいいな。
そんなことを思いながら、一分もたたないうちに、クロードのところの部屋と同じような飾りが付いた、豪華なドアの前についた。

「それでは、行ってらっしゃいませ」

深々とお辞儀をして、あたしを部屋の中までに案内しないようだ。
クローデの時と違う扱いに、あたしは疑問を抱く。

「あの、なんで部屋を開けないんですか?」

「わたくしはこの部屋の人 アシル様と、あまりかかわりたくないんです」

かわいらしく、にこりと笑うが、そこに何かただならぬものを感じたあたしは、それ以上の探索をあきらめ、扉を開けた。

「あの……保崎です……」

部屋の奥にいたのは、

「ああ、いらっしゃい」

椅子に座った、クロードよりは小柄な男性。まず目に付くのは、縁なしのメガネ。その奥の瞳は茶色く、瞳と同じ色の髪は、長髪を後ろで三つ編みにしている。おつとり系のようなオーラで、背後には花が見える。

見た目は大丈夫そうな人だが、油断大敵。警戒せよ。すると、アシルさんは、すぐに手元の本に目を落とす、第一王子。本の題名は「Q 猪瀬でハンバーガーは食べれるのか?」。

「……なんか、どこかで聞いたことがあるような題名ですね……」「この本を知っているのかい？ 略して『猪瀬ハ』だよ。本好きなら、話も弾みそうだね」

いえ、あたしは大体、ラノベ、しかもハーレムものくらいしか読みませんから。

と言おうとしたのだが、その隙も『えず』に椅子に座るように勧める、アシルさん。

「あ、ありがとうございます。座らせていただきます」

うん、この人はいい人だ。

にしても、こんなに紳士的なら、何がいけないのかな……。

と、思考をしていると、廊下からだだっという音と、メイドさんの「いけませんッ！」という声がした。

「…? なんでしょつか

わあ、とアシルさんは首をかしげる。

その時、盛大な音を立て、気温は結構低いのに、半分露出しているハーデレスを着た、ケバイ女の人気が入ってきた。

その人は、あたしの顔を見ると、たっぷり口紅をつけていた唇の端を、ぐ、としたに下げ、

「なんなのこの小娘!」

と、怒鳴った。

「はー? あたしは保崎 秀名です」

「ホザキ? 変な名前いやがって。あたしのアシル様に、近づくな、糞アマ!」

……あたし、悪いことなんてしていなこと思つんだけどな……。
いや、待てよ。

お母さんの財布からひとり五百円パクッたのがばれた!?
いや、あの時は五百円だからいいやとか思つていたけど、もはや怨念
が異世界まで来ちゃうとは思わなかつたよ。

「お母さん、『めんなさい』……お母さんにとつて五百円がそんなに
重いものだとは思いませんでした……ですから、ちやんと成仏して

……」

急に語りだしたあたしに、お母さん(らしき人)は、ひくつ、と
顔を引きつらせる。

そして、違うわけ? と、唾がかかつそつな勢いで怒鳴つてき
た。

「あんた、アシル様を横取りしようとしているのねー? わかつた

わ。でも、アシル様は私のもの」

「え? 待つて。君、誰だっけ」

ぴつきーん。

空気が、張りつめた。

すべてはアシルさんの一言によつて……。

「ああ、思い出した。君、街中で、いつも僕に焦げたクッキーをくれる人だね。真心はこもつているけど、正直言つて、それなら下級貴族の娘さんたちがいつも売つている、屋台のクッキーのほうがましだな」

すると、その時。

ぱあん。

女の人気が、アシルさんの頬に、平手打ち。

「そんなにひどい人だとと思わなかつたわ! もういい、帰ります

!」

ミーのスカートを翻し、彼女は廊下の奥へと颯爽と消えて行つた。

「……あの、大丈夫ですか……?」

口の端を赤くして、頬を抑えているアシルさんに駆け寄り、恐る恐る顔をのぞく。

まさか、この人もクロードみたいな遊び人……？　いや、悪女、
じゃなくて、悪男？

すると、彼の口から、とんでもない一言が吐き出された。

「どうしたんださうか……僕は本当のことと言つただけなのに……」

ああそうか。こいつは、悪男じゃない。

天然の、悪男なんだ……。

「天然キャラ、撲滅しろーっ！」

あたしはアシルさんに、さつきの人よりも大きく音を立てた平手
打ちを食らわし、部屋を出た。

Q 次男登場。恋の予感はあるのか？

A、絶対、む・り！

第六の問に「三男は、おいつなんだけど、どうか？」

「あつちゅー……すみません、突然、意味不明な乱入者を入れてしまって」

手を振りながら出てきたあたしに、メイドさんは苦笑い。
どうやら、あの平手打ちの音は、そこまで画いたみたいだ。

「さて、次の部屋に入る前に、着替えてもらえないでしょうか？」

小首をかわいらしく傾げ、質問をするメイドさん。

「え？ なんですか？」

「実は、お伝えしたくはないのですが、次の人物、三男、第三王子
は、あなたとともに仲の悪い あの人なんですよね」

その言葉で、ぴつきーんとくる。

中の悪い つまり、あいつだ。冷血人間キャラ、黒髪の、いや
あーなやつ。

「その人が、ジャージで来られるなど、おっしゃっていたので、着
替えていただこうかと」

「うん、あたしも登場草々で怒鳴られるのはまっぴらじめんだ。
というわけで、着替えることに。」

「ドレスとメイド服。今用意できるのはこれくらいでしたが、どう
うがよろしこでしょうか？」

そ、それは究極の選択……。

あたしはどうちも似合わないのは自分が一番わかっているし、着替えてメイクしたら美人さんになる設定なんて、あの作者が作るわけないし。

でも、メイド服で行つたら「ふざけているのか……？」とか言われそうだし。

「じゃあ、ドレスで……」

ああ、ドレスなんて着るの、七五三以来だなあ……。

Q 三男は、あいつなんだけど、どうか？

A、答えるまでもない。

「失礼しまーす……」

ドレスなんて着たことなかつたから、數十分も苦労して、ようやく三男と会うことに。

そこで待つっていたのは、予想どうりあいつだ。

「遅い！ 何やつていたんだ！」

腕時計を見ながら、怒鳴り散らす黒髪のイケメン。レイだ。

「あんたのお望み通り、着替えてきたんですよー。文句言つ筋合ひはありませんー」

あたしのやる気のなさそくな答へこ、レイはまつをく、

「ふん。お前にドレスなんか、もつたいないな。豚の着ぐるみでもよかつたんだぞ？ お似合いで」

悪口。

ふん、そつちがそつこいつもつなら、レーハだりて書つてやるよ。

「あんただつて、人のこと言えないとじゃないのー？ あんたのお兄ちゃんたち、あたしが来たら椅子進めてくれたけどー？」

「あいにく、この椅子は纖細でな。お前が乗つたら壊れそつなんだ」

「ああそう。じゃあ、あんたが乗つても壊れるわね」

「ほめ言葉をびつむ。レーハちは鍛えているんで、お前とは重さの種類が違うんだよ」

「あらやつ。じゃあ、一生、その椅子には座らないよつて気を付けてね」

おほほほ、と口元に手を開け、上品な笑い。

レイも、はつはつは、と、腰に手を当て、寛大な笑い。

ところが、その笑い合戦も、すぐに死せる。

「おり、表でるや」りあーーーの俺様に何言つまくつてんだおりあーーー！」

「そつむじを出なきこよーーーのあたしに、何回悪口行つたら氣が済むわけーーー！」

バチバチと、火花を散らす。

すると、不穏な空氣を察したのか、メイドさんが部屋の中に入ってきた。

「レイ様っ！？ 保騎さまー！？ わやめくださー。」

あたしとレイの間に入る。

その途端、レイが「おまえ、よつやるよな」と、不思議な一言を発する。

するとメイドさんは、少し待つていてください」と、黒い笑みとともに言い残し、レイを部屋の隅に連れ込む。

何やらこそこそと話し合っているようだ。会話の内容は『奴になつたが、プライバシーの侵害になりそうなので、あたしは椅子に座つて待機。

数分後、げつそりしたレイと、生き生きとしたメイドさんが、あたしのもとに来た。

「お待たせいたしました。では、話の続きを」

一礼し、スカートを大きくひらがえし、ほねぼねするよつな歩き方で部屋を出て行った。

残されたのは、あたしと、魂を吸い取られたかのようなレイだけ。

「…………あのー…………大丈夫ですか…………？」

「ダメだ。誰でもいい、助ける」

そういうて、手を取つてきたレイ。

あたしはいきなりの行動に、悲鳴を上げ、

「変態っ！ 触るなボケっ！」

優雅に平手打ちではなく、得意な右ストレートを食らわして、あたしは、メイドさんのように、部屋を後にした。

はじめて、あのメイドさんの正体って……？

第七の問に「四男五男は最悪か？」

「メイドさん、あのー……」

あたしは、メイドさんに追いつき、裾を引っ張る。ふりふりの纖細なレースを引っ張るのは気が引けたが、まあ、仕方がない。

すると、レースが破けるので、と、表情にだし、さりげなくあたしの手を外す。

「なんでしょう？　あ、次は双子なので、四男と五男、一気に行きますよ」

「いや、そういうじじゃなくて。あなたの名前とか、そういうえば知らなかつたなーって」

あたしが聞くと、戸口ひとつ、かわいらしげ顔で、答えた。

「これからわかりますよ。心配なく」

それだけ言つと、あたしの背中を押した。田の前には、ドア。

「ひ、開いていいですーっ！」

強い力で押されたので、あたしはドアに激突　しなかつた。ギリギリのところで開き、田の前に、白い腕が広がった。そのまま、ふわりと誰かに抱きかかえられる。

「はー、捕獲ー」

「え、何やつてるの……怖い怖い、ヤダヤダ連れてこないでーっ！」

捕獲とか言つてる、もはや人間扱いをしてくれない人は、ストレートの金髪。^{ヨキ〇〇}青い目。

あたしをみんなの嫌われ者扱いのようにしている、失礼な人はくるくるの巻き毛。^{ヨキ〇〇}緑色の目。

巻き毛さんのほうは、森であつた、エンジェル　いや、ジェル君だ。

じゃあ、もう一人は……？

「初めましてー。ジェルのことは知つてゐるんだよね。僕、ジェルの兄、シェルだよ」

あらー。ジェル君と同じく、かわいいキャラですかー？
と思つたら、隣にいたジェル君が忠告。

「シェル、かわいいキャラじゃないよ。小悪魔だから

え？ 何それ。

そう思つてると、ぎゅ、とシェル君が、きつく抱きついてきた。

「わわわ、何々つー？」

慌てていると、衝撃の一言を繰り出した。

「うん、じカッPかな。まあまだね。僕の範疇にはないけど

死ねーつ！

Q 四男五男は最悪ですか？

A、ジェル君は分からなけれど、シェル君は女子の敵。死んだほうがいいと思う。というかいつそのこと死ね！

こきなり、みぞおちに強烈なパンチを発動したあたしに、ジェル君はひい、と部屋の隅に逃げる。

「はー、はーつ。死ね死ね死ね死ね……」

あたしは彼の横にしゃがみ、お経を唱える。

その光景を見て、逃げようと確信したらしいジェル君は、壁に沿つて力一歩きをし、ドアに向かつてダッシュ。

あたしはジェル君より、自分の感情を吐き出すことが最優先なので、そちらをちらりと見ただけで、再び作業再開。

「もうやつてやれないよーっ！ これだから女人って苦手なんだーっ！」

泣き叫びながらドアを出ていくジェル君に、キャラ確定。

こじつは女嫌いキャラだ。

「かわいい顔してるのに、なんつー性格だ、この兄弟」

ため息と自分の中にある黒い気持ちを吐き出した時、廊下から悲鳴が聞こえてきた。

「はーっ！ あればジェル君の声ー どうしたのかな。まさか、このお話はミステリーなのー？」

ミステリーは嫌いじゃないあたしが、胸を躍らせて悲鳴の聞こえたところに行くと、ジェル君と、その襟元をつかんで黒い笑みを浮かべているメイドさんがいた。

「あの、何かあつたんですか！？」まさか、さつ、殺人とか「いえ。違いますよ。彼はただ、失神しているだけです。さて、連れて行つてあげてください」

そういうで、名残惜しそうにジェル君を渡すメイドちゃん。な、何があつたんだ……。

「あ、田覚めたときに、悲鳴を上げると思われますが気にしないでくださいね。彼はほんっとうに女性が苦手なんですよ」

おほほほほ、と口に手を当てて優雅な笑い方をする。

「そりゃ、ですよね。わかりました、戻しておきます。

あたしはジェル君を遠慮なく引きずりながら、部屋に戻つて行った。

部屋の中には、シェルがつなされながら左右にじくじくめいていた。

Q 四男五男は最悪ですか？

A yes。シェル君に加え、ジェル君も、たぶん最悪です。

「う……」

しばらくしていると、ジエル君の意識が戻ったようだ。うん、これもあたしがベットに運んでおいたおかげかな。いいことをした、みたいな顔でジエル君に声をかけると、

「うわああああああつー？ ベットに運ばれたああああ——一つ！」

と、世界の終りみたいな叫び声をあげられたので、あたしは、

「死ね糞野郎つ！ 女子の何が悪い！」

近くにあつた花瓶を投げつけた。

うん、悲鳴は上がつたけど、すこし的をそりしてあげたから、心配はない。

第八の問い「六男は、まともな人か？」

さて、最後だ。

これで全員との面談が終わる。あとは恋愛ゲーと同じ要領で攻略していけば大丈夫だろ。

にしても、遊び人、天然悪男、冷血人間、小悪魔、女嫌いとそろつたけど、あとは何が来るんだろう……。

は、まさか、ムツツリ！？『めん、あたしあれには萌えない体质なんだ。そうだったら、逃げよう。

そんなことを考えている時間、約二十秒。その間、上を見てボーッと突っ立っていたわけだから、メイドさんがあわてて声をかけるのもわかるよ。

でもさ、お願いだから顔をつなぎ、現実に呼ぼうとしないで……。

「い、いはいですメイドはん」

「痛くないですよ。最後なんですからつき合つとなさつてください」

あれ、なんか田の色変わったよね。なんでだらう。すると、メイドさんが、部屋のドアを開け、中に入つて行つた。

これまでとは違う行動に、首をかしげる。

そんなことをしていると、メイドさんが早くしてく下さい、と言つてせかすので、慌てて中に入つて行つた。

「はいはい、入りましたよメイドさん。ここにちは、保崎です……つて、ええつ！？」

中にいたのは、メイド服を豪快に脱いでいる、メイドさん。

ああ、文章的にも頭的にも混乱を招きそう。

「あのっ！ 何があつたんですか脱がないでくださいメイドさん！
ああ、六男が悪いことをしたとかそういう感じですね！ わかりました、あたしがぼっこぼこにしてやりますよ。さあ、出てきなさい、女の敵、魔性の六男！」

「あああ、うつざいんだけど。わつきから兄様の顔やらみぞおちやらを殴つててさ」

声がした。

小鳥のさえずりのよつに、透き通る、きれいな声。その声は、複雑なつくりのメイド服に苦戦している、あのメイドさんのはうからした。

「…………え…………？」

きょとんとしていると、上半身は脱げたようで、安心したメイドさんが、じりりを向いた。

「僕。僕がその声発してるの。わかる？」

眉をひそめ、どちらかとこいつと睨みつけるような視線を送つてくる。

その人物は、先ほどまで、ロリータといったほうがいい、ふりふりのメイド服を着ていた、メイドさん と、思われていた人物。

「僕が六男。第六王子の、ソウシ。兄さんたちにした分、返してあげるから覚悟しておいてね」

「ああ、こいつは、最近人気が出てきたキャラ 」
「女装男子キャラだ……」

Q 六男は、まともな人か？

A、まともじゃないです。一番。

「ど、言つわけで。しつかり、歯を食いしばつてね」

いやいやいや、上に一枚着てください、下半身スカートつて異様な光景です。つていうかいつの間にメイク落としたんですか。つていうかなんでそんなにブラコンーつ！？

「失敬な。僕はブラコンなんかじゃない。男の人人が好きただけだ！」

堂々と、高らかに宣言したソウシに、あたしは思わず冷たい目を向ける。

空気が凍り付いてきたと思うが、そんなこと微塵も気にしてないスイッチが入ったのか、彼は顔を少し赤くし、それでも声のトーンを落とさず演説。

「男の人つていいだろ？……あの体！」

あたしは近くのクッショングラフを投げつけた。

それを、少し体を動かし、かわす。
くそ、何て奴だ……！

「あの低い声……特に、クロードがいいと想つよ……」

ああ、ここは腐つている——

「こいつも逆ハーレムの対象になつているのがヤダー！　こいつも好かれるなら、全国のムツリさんに好かれた方がマシだー！　すると、その叫びを、思わず声に出していたのか、表情に出ていたのかは知らないが、とにかく察知したソウシは、む、と唇を尖らせる。

「なんだよ。ムツリが嫌いとか、贅沢なこと言つてんじゃないよ」「え、待つて、説教モードに入りそう！　やだ！　こいつに説教されるとかマジヤダ！　幼稚園児にケータイの使い方教わるほうがまだましだー！」

「何言つてるんだよ。そんなことしないって」

机の上に重ねてあつたTシャツに手を伸ばし、ソウシはくすりと笑う。

「まあ、今日は夜にレイお兄様と逢引する約束したからだけね」

「あ、そうか、あの時、レイが死んだような顔していたのはこのせいか。まあ、この木モ百合なら、何されるかわかんないね。あたしは心の中でだけど、レイに合掌。

無事に、夜を過ごしてくれ。

「とにかく、僕は愛するお兄様　いや、男の人気が、君に樂々攻略されるのが嫌なの。僕も逆ハーのメンバーに入つていてるけど、君には協力しない。いや、むしろ邪魔をする」

その瞳に、黒い光が宿つたのを、あたしは見逃さなかつた。

「だから、僕は君に恋なんてしない。いや、できない。だつて女だもん」

うわー、なんだか男が言わない言葉ランギングの十位以内には入りそなお言葉。あ、後半部分だけね。

「だから、君の逆ハーの計画は失敗に終わるだろ? ああ、それと忠告。もし、お兄様一人でも君に惚れるなら、君を葬るのに手段を択ばないからね。覚悟しておいてよ」

着替え終わったソウシは、あたしをまるで恋敵のように見ている。いや、あたし、あんただけじゃなくて、全員に好かれる自信がないんですけど!?

「そんなこと言つて、本当はバリバリやる気なくせ!。やだやだ、女人の人つてやだ」

「ああもうウザいなあ。あたしが何か言つ?」と突つかつてくんのやめてよ!」この、女装ホモ男!」

「ああ? 女装はオプション。男の人に好かれるための手段!」「それがキモいつて言つてんの! 女嫌いキャラはすでにいるんだし、やめたら? そのキャラ」

「やめるもんかよ。お前にそ自分のキャラはなんなんだよ。言つてみろよ」

「ふん、オタク女子。これで結構コケコッコー」

「古いんだよギャグが!」

「新しいギャグないから仕方ないじゃん!」

数分、そのような低レベルののじり合ひをしたのち、ソウシが折れて、部屋を出て行つた。

あ、忘れてたわ。恒例のあれ。

あたしは、あの恥々しいソウシの後ろ姿に、助走付きのとび蹴りをして、その場から逃げだした。

第九の問い「攻略はできそつなのか？」

全員の面会が終わったので、最初にいた部屋に戻つたあたしたち。

「俺は、遊びならいいけど、本気の恋愛となるとどうかなあ……？」
「僕は、暴力をふるう女性はちょっと……」

「論外だ、論外。早く帰れ」

「ちょっとサイズ測つただけじゃんか。ケチな女の子は嫌い」

「ボク、女人のが苦手だから……」

「僕も無理。男性しか愛せない、悲しいハートを持っているからね」

あたしの目の前で好き勝手に言いまくる、六人のイケメンたち。
ああ、あたしM属性じゃないからダメです……。言わないで……。

「そもそも、美女だつたら行けたと思うよ？ なんで顔を変えさせなかつたのさ。性格はそのまま、顔だけ変えることも可能でしょ？」

シェルがもつともな言葉を言つ。

「あたしもそう思います！ なんでこの顔なんですか？」

食つて掛かると、ふう、と呆れた顔をする王様。

「何を言つているのかね。恋愛ゲームだつて、恋する男の子に、『やーいやーい、ブスー』とか言われているだろ？」

「それは特殊なものなんです。照れ隠しというか、そんな感じです」「だつて主人公の女の子も、『あたし、不細工だし』とか言つているじゃないか」

「それは行き過ぎた天然なんです！ 自分の顔の良さもわからない

天然ちゃんなんです！ そりこりのが萌えるんです！」

でも、とまだ言おうとする王様に、あたしは最後の言葉を投げつけた。

「いいですか！？ モテる女の条件は、一に顔、二にスタイル、三に胸なんです！ 性格なんてどこにもありませんよ！？ よっぽど性格がいい人でも、顔がダメだったら恋愛対象から除外されますよ、除外！」

「なにっ！？ おひ……つ……」

威力はすげかつたのだろう。ショッキングな顔をしている王様が、ふらりとよりける。

「そうだったのか……やはり男は顔なんだな……じゃあ、王妃を顔で選ばなかつた私はいつたい……」

「そうなんですか、あなた」

思わず口を滑らしてしまつた王様に、王妃様がゆらりと近寄る。王妃様は、そのまま、人類の最期的な悲鳴を上げた王様を引きずりながら、兵隊を引き連れ部屋を出た。

「……かかあ天下……？」

あたしが一番しつくつくると思つた単語と口にしたとき、頭に衝撃が。

「つたー……何すんのよー」

後ろを振り向くと、手をグーの形にした、レイが立つていた。

「何じゃねえだろ、つていうかそれはこいつのセリフだバカ！　男は顔で決めるだあ？　なめんなよ！　やうじつ女のほうが男を顔で決めてるんじゃねえの？」

「もち

そっけなく言つたあたしに、レイはもう一度じぶしを振り上げ、そのまま落とす。

がつん、と見事な音がした。

「いつたー……何すんのよ！」

「いいかよく聞け。顔で好きなやつ決めるほど、俺たちはバカじやねえんだよ」

あ、いい言葉。と、少し感動した時、レイが啖呵を切つた。

「俺はお前と真剣に向き合つ。だからお前も、真剣に攻略しに来い！」

「え……？」

フリーズ。空気が凍り付き、背後に「……」という文字が浮かぶ。

兄弟たちの冷たい視線を浴びて、しまつた、といつよつと口元をふさぐレイ。

だけど、言葉は取り消せません。

「言つたな……？」

きりり、と目を光らせたあたしに、レイは慌てて、手で宙をかき回す。

そんなことしたって、言つたことは消せないもんねー！

「じゃあ、あたしは本氣で、お前ら六人、攻略しに行くから、」

びし、と六人を指さす。
シェルに回し蹴りを連発されているレイを見て、少し同情してから、続きを話す。

「覚悟しててよー。あたしは、異世界で逆ハーレムを作つてやるんだからー！」

そこで、あたしの目の前の景色が変わった。

攻略キャラは六人。

遊び人、天然悪男、冷血人間、小悪魔、女嫌い、そしてホモ女装男子。

みんな、あたしに対しての印象は、対象外から、多くて十。

「攻略しまくるからね。覚悟しといてよー……」

それじゃあ、今から本当の、ゲーム・スタート！

「攻略開始つー！」

あたしは、ポカーンとしている彼らを見ずに、部屋から出て行った。

Q 攻略はできそうなのか？

A、今のところは不明だけど、やって見せる！

第十の問い「他人の恋を操れるのか？」 前編

攻略するつて啖呵切つたけど、いつたこびのよひにして攻略するのか……。

あたしは、ドレスが汚れるのを気にせずに、腕を組みながら、屋敷の中を探検中。

等間隔で、高そうなツボが置いてあるのに少しムカッとするナビ、まあ、歩いたほうが考えやすそうでしょう。

ぽふぽふと足音を立てながら、慣れないヒールで、歩きまくる。

「三人寄れば文殊の知恵というけれども、一人だし、何も浮かばないし」

真っ白な頭を叩きながら、独り言をつぶやく。

しばらく歩いていると、前からメイドさんが歩いてきた。

白いHプロンドレスに、レースのついたカチューシャ。うん、やっぱソウシのメイド服は趣味のものだな。にしても、よくあんな格好するよね……。

と、そんなことを考えてみると、普通にすれ違つと思つていたメイドさんに、がし、と腕をつかまれた。

「はーっ！？」

「あの、保崎 秀名さんですよねー！？」

プロンドのツインテールを揺らしながら、切羽詰まつた顔でたしに詰め寄つてくる。

「あ、あの、困ります、私いじめとかそういうのは経験したことなくてですねえっ！」

「違います、助けてください、あたしの恋を、指南してください。」

はーーっー？

彼女は、下端メイドのミル、とこりひじご。

メイドなんて、この屋敷に余るほどこるのに、しかも下端で、ミルといつ立たない名前といづ、とにかく存在が薄いのが悩みの十八歳だ。

「つてあたしより年上ですかっ！？」

「ははは、いいんですよ……あたしなんかチビで、童顔で、胸もなぐで、性格も悪くて影も薄くてドジばっかりしていつも怒鳴られて……」

「あーー、イイです、むづやめでくださいーーー。」

あたしがとあると、ミルちゃんは口を開いた。

「あたしが唯一褒められるのは、手先が器用なだけです」

額をじがらせながら机に向かって、あたしは何かフオロー。

「そんなことないですよ。大人の女性感がしますし、髪もきれいですし、手先が器用なんて」女っぽいし、それから……えーっとえーつとお……」

「わーいこです秀名わん。本題に入りますね」

肩を落としたミルさんは、やや投げやりに話を変えた。

「あたしが今こうして秀名さんに声をかけたのは、言つた通り、恋を指南してほしいんです。まあ、簡単に言つとコントロールです」

「これ、と言つてミルさんが写真を取り出した。

写真には、茶色い馬の上に乗る、銀の甲冑を着た男性が写つている。

「この人は……？」

「あたしの思い人、カロさんです。かつこういでしょ?……?」

何故あたしに意見を求めてくる。まあ、確かにかつこういとは思うが、そこまでずば抜けているわけではない。つまりは、平均レベルだ。

そんなことを考えていると、涙ぐんでこるミルさんに気が付いた。

「やっぱ平均レベルとか思つているんですねーーー! みんなに言われるんですよーーー!」

「え、あと、ミルさんは、なんでカロさんのこと好きになつたの?」

あたしが聞くと、真っ赤な目で見上げてきた。

「数日前です。あたしは、庭で、親とはぐれた小鳥を発見したんですね」

「ああ、想像つく……べたなパターンだる……。天井を仰いでいると、思い通りの答えが。

「どうしてかと思つていると、カロさんが来て、あとは任せで、ついて回ってくれたんです。それから……」

「あー、あーっ、わかつた、わかつた。とにかく? どうすればいいの?」

「あたし、いろんなことがあるつかと、すでにアプローチ済みなんですよ。あとは面白だけです」

田舎満々に書い//ルさんに、あたしは、

「まあ、まずは握手がどう思うかだよね」

「え? 立ち上がって、どうしたんですか? これから何を?」

「もちろん、ミルさんがカロさんと会つて、どんな反応をするのか確かめに行くの。まずはそれから始まる」

逢いに行くよ、といつたあたしは、ミルさんは赤面しながらも、しぶしぶ立ち上がった。

話していた部屋を出て、じぱりへると、レイにあった。

「…………ひのメイド引き連れて、何やつてるんだ……?」

怪訝そうな顔をしたレイをスルーして、そのまま進む。すると、慌ててレイが引つ付いてきた。

「…………ひのメイドのせい」

「なによー。あんたに関係ないことー。」

「ある! なにかされたら、俺が怒られるんだよー。」

「あんたに関係ないって言つてんでしょう?」

あたしが口づんかを始めようと身構えたとき、ミルさんが、イイです来てください、といったので、レイはまだヤニ顔。
「つづええ……。

「来てもいいけど、邪魔しないでよ？」

「だから、何をするんだ？」

「し・ご・と！」

Q 他人の恋を操れるのか？

A、絶対に成功させてみせる！

第十の問い「他人の恋を操れるのか?」 中編

「うん、あれが力口さんだね。よし、じゃあ行つて来い!」

少し歩いたところにある乗馬場で、力口さんを見つけたあたしは、乱暴にミルさんの背中を押す。

「わあつー!?

背中を押され、バランスを崩したミルさんは、どて、と顔から着地。

どしん、といい音が響く。

その途端、優雅な馬たちが一斉に鳴き始める。

「ど、どりじたんだ……? あ、ミルさん」

ようやくミルさんを見つけた力口さんは、茶色い馬から飛び降り、駆け足で駆け寄る。

「どうなんだ? 今のところ脈ありか?」

「ここに来るまでは事情を説明しておいたので、レイがあたしに聞いてくる。

「ああもう、つるせじよ。黙つてて」

耳をふさいだあたしは、一人に神経を集中する。

ミルさんの前にはコマンド。『「ありがとう」』、『「大丈夫だから」』、『「何も言わず手を取る』。

うん、ここは無難にありがとうだろ。相手のキャラも不明だから。あたしは口パクで、ミルさんに伝える。

すると、伝わったんだかどうかわからないが、ありがとう、と笑つていつた。

「ナイス笑顔っ！」

「……お前、つべづべくなやつだな……」

怪しいものを見る目で、レイがあたしを見てくる。

「なんですよ」

「だつてそりゃだら。他人の恋なんか、ほつときやいいのこ

あのねえ、と言ひ返せつつ思つて、口を開けたが、あたしの言葉の前に、力口さんの言葉。

「よかつた。大したことがないで
「はえつ！？ ひや、ひや……」

返す言葉が見つかからなかつたのが、ひや、を連発するミルさん。にしても、あたしのカンに狂いがなければ、告白してもこけそな気がするんだけどな……。

せう思つて、あたしは手でミルさんを呼ぶ。

「はい？ なんですか？ あ、もうダメダメとか！？ も、そりやあ緊張して噛んじやいますよ…」
「もうじやなくて。行けんじやない？ 告白しても

すると、ミルさんの顔が真っ赤になつた。

「いや、いや、そんなあたしは無理です。」

「え？ なんでここまで来て嫌がる。もともとそれが目的だつたん
でしょ？」

「それでも心の準備があるということですよ。」「あ、じゃあこうすればいいんじゃないかな?」

急いで口を挟んでやめたレイジ、ハレハレのせひやあ、ヒヅキを上げる。
な、なぜに悲鳴……？

「あの、レーベン博士とはいえ、プライベートに首を突っ込まないで頂けたく――

「違う。ま、明日は創立祭だ
「あ、そうこえはそうですね」

また、待つた！創立祭つて何よ！

「創立祭とは、この国ができた日にちを祝う日なんです。屋台がいっぱい出て、お祭り騒ぎで騒ぐんです」

「その時、男女が好きな相手に花を贈り合うイベントがあるんだけどな……」

あ、その時は出でてことね。まあ、お祭りだからこいと懸う。
そう意見を出したあたし曰く、「冗談は、え、でも、とまだこい」。

「もう！　いいでしょ明日で！　この国が創立した日と、あんたたちの仲が創立した日、一緒で！　嬉しいでしょ、そうでしょう！？」

有無を言わせぬあたしの声に、じへじへうなづくミルさん。

「よし、それじゃあ決行だな。明日の朝に、私服で俺の部屋の前に集まれ。作戦会議するぞ」

「うん、そうだね。でも、その前に」

あたしはまた、ミルさんの背中を押す。

「創立祭に誘つて来い！」

「あ、それがあつたか」

「きやああああ―――っ！？」

Q 他人の恋を操れるのか？

A、うーん、ゲームならできるんだけど、わかんない。

「あの、着てきました、私服……」

そういうてくるミルさんは、健康的な足を出した、ミニスカート姿。

上は、ハートのワンポイントが付いたTシャツに、薄手のカーディガンを羽織っている。

ほほ、私服はあたしの世界と一緒になのか。

「まあ、いいほづだと思つた。……むしろ、問題はおまえだら……」

レイは、肩のところに赤いラインが入った、いつものジャージを着ているあたしを見て、唸る。

「え？ だつてあたし、参加しないんだしいじゃん？ 遠隔操作

するよ。トランシーバーみたいの、無いの？」

ザ・引きこもり発言をしたあたしに、レイはひじ打ちを食らわす。
うぐつゝ…………。

「ねこメイド、この家の腰も任意してやれ……サイズは回りがいいんだね……」

「か、かし」まりました……」

「……」じんなんで、ミルさんの恋、叶うのか……？

「叶うだろ」

ミルさんが出て行つたあとで、ポツリ、とレイが言つ。

「と、言うか、お前が叶えるんだろ」

「口、と、今までに見たことのない笑顔を見せる。」
「いつ、笑うといい顔じゃないか……。」

「……なんだよ、人の顔じつと見て……」

「なんでもない。もうそろそろ、ミルさん来るんじゃない？」

あたしは、頭の後ろで手を組み、投げやりに言った。
ま、今はこいつの攻略より、ミルさんの恋だよ！

第十の問い「他人の恋を操れるのか？」 後編

「「めんね、待つた？」

ナチュラルなポロシャツに、深緑色のカーゴパンツ。いかにも私服、といった格好をした力口さんが、待ち合わせ場所に現れた。

うん、服装はまあまあね。あんまり気合入れてないみたい。かといって、手抜きそうでもないし……どんな心でここに来たのか、読み取れない。

「ま、待つてないです、ないです！　というかあたしが早かつただけで！」

時計を確認すると、待ち合わせ時間ぴったり五分前。力口さんのキャラが読めない……。

「そりなんだ。何時に来たの？」

「い、今来ました！」

嘘つけ……待ち合わせ時間の三十分前には来ただろ……でも、そんな乙女心、かわいい！

「……お前、さつきからびつぶつ何言つてるんだ……？　せつかく服で磨かれたのに、そんな行動じや、意味ないぞ……」

パステルカラーのワンピースに、レギンスというあたしのスタイルに、妙な表情をしたレイが、ツツコむ。

そんな彼は、目印ともいえる、冬の夜空のような黒髪を茶色く染め、さらにはメガネをかけた、変装つぶりだ。

一応王子だといふことは隠せてこむりうだが、やはりその顔立ちの良さで一気に黄色い歓声が。

近くの女の子の集団が、「あの女の人、彼女かな?」「えー、違うでしょ、兄妹か何かだよ」「やつぱー? 釣り合わないよねー」という会話をしながら、あたしの横を通り過ぎる。

「……レイつてさ、何歳?」

「十八だが?」

「一歳差か。うん、そりゃあ、兄妹に見えるわな。
じゃなくて!!

いいのかあたし、あんなうつざい性格した奴らに、ブスとかなんだとか言われて!

「ブスは言われていないだろ?」

「言われてるの! あたし的には! ああもう、服だけがかわいす
きて、釣り合わない……あんたどじやなくて、服との相性だからね
「それくらい言われなくてもわかるわ! ほら、あいつらが移動す
るぞ。追え」

あたしの手を引っ張りそういうレイ。

ああ、こういう少女漫画的尾行、好きじやない……ってか、似合
わない……。

「あれ食べたいです!」「あそこに行きましょ!」「あれはなん
ですか?」「ほら、カロさん、早く早く!」「

ダメだ―――――っ！――――！
あたしは、お出かけ開始から一時間たつたとき、ヒルとミルさんを呼び出した。

「あんた、やる気あるの？」

明らかにカラの悪そうな声を出す。
すると、ミルさんは、はつ、となにかを思い出し、

「あ、今日はあたしの恋を叶えるために来たんですね！」
「やる気ないでしょ。あたし、人じみ苦手だし、帰らうか？」

そういうて元来た道を歩く。「するあたしの手を、ミルさんが引
つ張る。

「ああああああ！――すみませんすみません！――お願いです、帰ら
ないでください！――ちゃんとやりますからあ――っ！」

泣きながら頼んだ彼女に、あたしはさすがに情がわき、戻る。

「ほつ……それで、具体的にどうすれば……」
「もうこうと思つて、応募してきたぞ」

いいことをした、とでもこいつよつて、レイがドヤ顔で、白いステ
ージを指さす。

そこには赤い、大きな蝶ネクタイをした男性と、長机に座つてい
る男女、合わせて数名。

その中でも最も目立つのは、中央に置かれた台と、その上に載つ
た人。

何をするのかと思つていると、急に台の上の人があう、と大きく息を吸い込み 、

思いつきり、叫んだ。

する。かくして、左側の耳から音が入り込む。

「…………これに、参加するんですかっ！？」

卷之五

うん、そのアイディアはいい。

「えっ！？ 秀知さんまで……」
「でも、言葉はあたしが考え方でいい。これでいい？ 最後はあたしに決めさせてよ」

ウインクをしたあたしに、不安そうに涙目なミルさんは、こくりとうなずいた。

『さて次は、かわいらしい十代の女の子が挑戦だ！ ミルさんつ！』

司会者の人気が名前を呼び、おどおどしたミルさんが、舞台袖から出ていく。

ポケットに突っ込んだ手は、あたしが用意したあれが入っているのだろう。

そんなミルさんだが、丘の上に上ると覚悟が決まったのだろうか、観客の席にいるカロさんを少し見て、大きく息を吸い込む。そして、

「あたしは、カロさんが、好きですっ！」

今までのヒントリー者よりも小さいが、彼女の精いっぱいの声が響く。

その途端、観客がざわつき、観客にいる「カロさん」を探す。

「ずっと、ではないですが、やさしいあなたに、心が奪われましたっ！ これ、受け取つてくださいー！」

やつじつヒミルさんが、カロさんに、あれを投げる。

「え？」

とつ セに受け取つたカロさんは、不思議そつな声を出す。手の中には、小さな、一輪のコスモスが収まつていた。

「あたしの大好きな花ですっ！ 受け取つてくださいー！」

震える声を出しつゝ、しゃがみこむミルさんは、カロさんは、ふ、と笑つた。

「これ」

ステージに上がつてきて、カロさんが何かを渡す。

それは、ヒマワリの飾りが付いたピン止めだつた。

「これなら例のイベントの一種だと気づかれないかなーって思つて用意しておいたんだけど、堂々と飾つよ」

顔を上げたミルさんは、真っ赤になつてゐる。

「好きです。付きました！」

その途端、ミルさんがうなづくと同時に、わつ、と歓声が上がつた。

Q 他人の恋は操れるのか？

A、あたしが出なくとも、大丈夫だったと思つんだけどな……。

「いやー、いい」としたわー」

「何言つてるんだ、お前、告白の言葉考えただけだろ」

「それでも重要なのは、あ、おいしそうな肉！」

「肉つてなあ……」

あきれたレイと一緒に、あたしは夕日が照らす煉瓦の道を歩いています。

両想いになつた二人は、ほおつておひづ。リア充は敵。

「まあ、イイか。そういうば、これ！」

レイがそつけなく投げたのは、少ししおれ気味のタンポポだつた。

「お前にせこれが一番お似合いだよ。」

なんかいい」と呟われてこる気がしない。
まあいいか。受け取つておけ。

「あらがとう。」

第十の問い合わせ「他人の恋を操れるのか?」 後編（後書き）

告白シーン、書くのが恥ずかしかつたです><
こんなで恋愛かけるのか……？ 私……^ ^ ;

第十一の問い「樂してトイナーになりそつか?」

「兄様と一緒に祭に行つたとか、死ね糞野郎! いつそのこと地獄に落としてやるよ!」

屋敷に戻ると、玄関のところで、敵意丸出しなソウシがうなつています。

「にしても、恋を叶えた、とかいいこと言つて居るけど、実際のところ、一人とも両想いだつたんだからその噂『マダよね!』? はいそのたつかあーい鼻ひつこめるー」

あたしの鼻の上をちょんちょんと突つつくソウシ。
ちよつ、くすぐつたいんだけど!

「でも、兄さんも兄さんだよ。なんでこんな糞尼と一緒に出掛けようとか思つたの? 僕のほうが断然かわいいのに」

体をくねらせながら近づいてくる弟姉妹を、ついとおしゃづけ手で払う兄。

彼……どうか彼女? は、露出度高めのチヨニックに、クリーム色のマートンブーツ。

もはや自分の性別忘れてるよね、あんた。

「ふん。かわいいからいいんだよ。あんたは根性」と腐つてるよね
「見た目から性格まで腐つてるあんたに言われたくないんだけど」

ぱちぱちと火花を散らすあたしたちに、レイが静止に入る。

「おひ、こい加減にしりよ。保崎は早く部屋に戻つてゐ。ソウシは

」

「今夜のレスチャーでもしてあげましょうか、お兄様」「断じて断る！　お前は男の服を着て、部屋に戻れ！」

えー、と文句を言うソウシを無理やり引っ張つて、レイが廊下の向ひに消えて行つた。

「……つたく、仲がいいんだか悪いんだか。よくわからない……」

一人残つたあたしは、ポツリとつぶやいてみる。
「うん、さみしい・むなしいのコンボだ。

「誰かいないかなー」

「呼んだ？」

「呼んでない、遊び人」

さつきからいたとしか思えないほど速さで、クロードが廊下の陰から出でてくる。

「ほら、もう田が暮れてきたから、僕の部屋にでもおいでよ
「意味わかりません。あたしは部屋に戻ります」
「それって、迎えに来てつて誘つてるの？」
「違うーっ！」

ぶん、と腕を振りまわり、振り切る。
わざと足音を立てて去つていくが、とてとてと、捨て犬の田でついてくる。

しばらくシカトしていたが、ついに堪忍袋の緒が切れた。

「せつせと自分の部屋に戻れ、ばかー！
「え、これからトイナードよ。そのためにはを探してたんじゃな
いか」

だつたら呼べ、言えつー！

あたしは屹々としてクローデの足を踏みつける。

「「あんね、僕、結構三氣もあるんだ」

死ね、糞つ！

とは言わづ、表情にだけじどめておぐ。

「うん、それじゃあ一緒にトイナードに行こつか。席は隣に座りたい
なあ。あ、秀知りやん、成人してる？」

さまざまな質問を繰り返していくクロードに、あたしはもう一度、
顔面パンチを食らわし、すたすたと、トイナードの会場に入つて行つ
た。

Q 楽しいトイナードになつたか？

A、いやー、無理つしょ。あの面子なひ。

「それでは、いただきまーすー！」

皿の前の皿には、肉、肉、肉うつー！

「これ、本当に全部いいんですかー！？」

「ああ、食え食え。まだまだあるぞ」

遠慮なくいただくあたしに、隣に座ったレイが、不安そうに眉をひそめる。

「お前、せつかぐのドレス、汚すなよ」

心配なところはそこかい。

確かに、このオレンジのハイビスカス、高そつだけれども……。

「さあ、成人したヤツは飲め」

「お父様、成人したものなど、僕たちの中に一人しかいませんが」

灰色の背広を着たシェルが、呆れ顔で言う。
なんだ、成人した人、一人しかいないんだ。

「うん。僕たち、クロード兄さんが二十歳、アシル兄さんが十九、
レイ兄さんが十八、僕とジェルが十五、ソウシが十四だから」

「へー。結構歳、同じなんだね」

「そう。それで、秀名が十六でしょ？ ソウシと一緒に離れてるねー」

な、なんでここでソウシの名前を出す…………？

すると、今までサラダを黙々と食べ続けていたソウシが、ぴく、
と肩を震わせる。

「シェルお兄様、なぜ、僕の名前をお出ししたのですか…………？」

「そりゃあ、そしたら面白くなるからに決まってるじゃん」

「お兄様、今晚、お部屋に遊びに行きますね？」

黒い笑みを浮かべたソウシが、席を立つ。

何故、みんな、彼が、ピンクのマーメイドドレスを着ているのに
ツッコまないのだろうか……。

まあ、それは置いておいて（よくないが）、一人席を立ち、しかもシエールが硬直している空気の中、楽しいお食事会、というわけにはいかなかつた。

みな、黙々とコース料理を食べ続け、あたりからは食器が当たる音しか聞こえない。

そんな空氣に耐えきれなくなつたあたしが、一いつと部屋を出た。

第十一の題「ソウシとは仲良くなれるのか……？」

「なんであんたがいるんだよ
「ヒーチのセリフだ、バカ」

なぜか、星空がよく見えるテラスで、あたしとソウシはばつたりと会いました。

いやー、本当は靴のつま先が出口に向かつてるんだけどね。まあ、こいつも逆ハーの対象だし、この機会に奴と親睦を深めておこうついではないか！

「えーっと、そういうえば、ソウシって、なんで男の人が好きなの？」

あたしがこわごわ聞くと、ソウシは少し怒っているのか、声を荒げながら答えた。

「君が男の人を好きなる理由と同じだよ」

「え……？ あたし、恋愛はあまり好きじやないなあ……つていうか、恋愛って、したことないし」

そういうと、ソウシが信じられない、といつ風に田を大きく見開いた。

な、何か文句あるの！？

「意外だね。疎い女子キャラとかマジでうざいー とか言いつらうのに」

「あたしは疎くないの。ただ興味がないだけ。機会がないっていうのもあるし、ゲームの中のほうが、よっぽど安心してできるじゃない？ だから、リアルでは避けて通ってきた道というか……そんな

「うるさい」

ぐるりとつま先の位置をソウシに向け、あたしはあこいつの上に広がっている、ピカピカと光る星空を見ながら答える。

「ああ、きれいな夜空だ……。」

あたしがじつと上を見ていると、いきなり噴出したソウシ。

「…………ふつ…………！ あんたに星空とか、似合わねー！」

「失礼にもほどがあるわよ！ あんたねえ！ 女装していなかつたら、もつといい絵になつてたのに！」

「え、とこいつとは、今でも絵になつてるつてこと？~」

ぴり、ヒップシンクのマーメイドドレスの裾を持ち上げ、ここりと笑う。

「あ、あたしはないと思ひつ~！」

「正直になりなつて。ま、僕は男性以外はこの瞳に入つてこないんだけどね。不思議と。だから君も僕の視界には入つていないよ」

あたしを指さし、くすくす笑いながら言つンウンウシに、あたしは回し蹴りをする。

しかし、奴はギリギリのところでしゃがみ、代わりにあたしの足を払う。

盛大にじりもちをつくあたし……。

「なんだ、弱いな」

「本物と偽物の違いがよおーくわかつただろ。本物はか弱いんだよ

「え？ 自分、偽物つて認めちゃった？」

「どう考へてもお前が偽物だろ、この変態ホモ女装男子~。」

Q ソウシとは仲良くなれるっぽいか……？

A、うーん、まざ意欲を持たなきやね……。

口論を始めてから約三分の間に、あたしたちはこうして罵り合つた。

「だいだいね、女装の恰好がいくらかわいいからって、男が釣れるとか思つてんじゃないわよ！」「釣れるよ。僕は、君よりかわいい自信がすっごくあるんだけど……」「可愛くつても中身は男だろ！性転換してからそういうセリフ吐けよ！」「いいさ性転換してやるよ。異世界にトリップして性転換してやるよ」「どういう目的でお前が召喚されるわけ？」「お前みたいに？逆ハー作れって」「無理に決まってるでしょ！性別の時点で無理！」「いやあ？わかんないよ。だって、性転換したら中身女の子だし？」

他にも色々と言い合つていたが、すべて書くと貴重な行がつぶれてしまつるので、ここへんにしておこう……。

とにかく、あたしと罵り合いをしていたソウシに、運悪く見つかってしまったのは、

「あー！ ジュル兄様！ ディナーはいかがでしたか？」

ぐるぐるの巻き毛が目立つ、ジュル君。

女人が苦手なジュル君は、壮絶な罵り合いをしていたあたしたちを、好奇心で観察していたが、見つかってしまつたらしい。

「あの、僕に関係なくお一人は修羅場をしていてください……！」

「ジェル兄様。今夜のお約束、忘れていませんよね……？」

上田づかいで聞くソウシに、涙目だが何とか反論したジェル君。

「わ、忘れました、そんな約束！」

「では、今から行きましょう、お部屋に」

ぐいぐいと引っ張るソウシ。

見た目こそ女人だが、腕力は男だ。か弱いジェル君は、かわい
そうに、ソウシに連れ去られてしまった。

「頑張って、ジェル君……」

彼らの背中と、ジェル君の「助けてーっ！」という悲鳴を聞きながら、あたしは同情の目を向け、合掌した。
無事に、今日を乗り切つてほしい……。

第十一の題「弱みを握つてみなみひ題つたが……？」

「はーあ……。なんか疲れた……」

肩を落としながら、あたしは廊下を歩いています……。
どうも、ソウシとことんと疲れてしまつ……。

「ほんな時こゝで、一人、ラノベを読むんだ！」

ぐ、拳を作つて、むちむち近くのメイドさんに、本が読めぬとい
うはないのか聞く。
すると、

「それなら、図書館に行つてはいかがですか？」

と、図書館っ！？

図書館なんものが屋敷の中にあるのか！？ ジリコハヒトジだ！
少しショックなあたしを残し、メイドさんは疋早に去つて行
つた。

「よし、向かおう！」

声に出していittはいにモノの……。

「ビーハあるののか聞いてねえーっ！」

うそ、バカをしました……。

とりあえずほかのメイドさんに場所を聞いて、あたしは図書館の扉を開けた。

すぐに、ほりつと、古い本のにおいが鼻を衝く。

「うぐひ……絶対、ラノベとかなれやつないよ……」

帰らうかなあ、と思いつこんど、上から顔がした。

「どうしたの？ 読書？」

不思議に思い上を向くと、上のほうの本を取る用だらうか、梯子に、足を組んで座っている、アシルの姿があった。

「……あたしが読書をするの、そんなに変ですか？」
「やうだね、かなり変だと思つよ」

ぐわあつー

アシルの言葉が突き刺さる。

「……で？ どの本を読みに来たの？」

悪気のなさそうな顔に、あたしは奴をにらみつける。
「の、天然の悪男がつ！」

「ラノベです。ありますか？」

「…………？」

ひらがなの発音で不思議そうに聞き返す、アシル。

「この世界にはないんですか？」

「ないねえ。『らのべつて、いつたい何の本?』」

首をかしげるアシルに、あたしは語りまくった。

ラノベのいいところをつ！

「ラノベとはですね、ライトノベルの略なんです。主に中学生から高校生に向けて作られている本で、まあ今となつちや年齢なんて関係ないんですけどね。挿絵は漫画やアニメ風のイラストで、結構ツボなんですよ、これが。もともとは「ジュヴナイル」みたいな名前だったんですが……って、聞いていますか？」

腕を組み、顔を下げ、口ックリ口ックリしているアシルに、あたしは質問。

「…………え？　ああ、聞いているよ聞いているよ

――『――』愛想笑いを浮かべるアシル。

「…………聞いていないじょう…………ところで、その本はなんですか?」

あたしは、彼が持っている水色の本を指さし、聞いてみた。

「ああ、これ？　前にも言つた本だよ。『Q 猪瀬でハンバーガーは食べれるのか？』だよ。読んでみる？」

フルフルと、首を振つて拒否。

「残念だよ。じゃあ、好みの本を探してね

そういうで、読書に戻ってしまったアシル。
う、なんかこれはこれでさみしい……。
うん、本以外の話題を出してみよう。
そうだなあ、何がいいかな。

「あ、そういうえば、アシルさんって、好きな人とか、いないんです
か？ いなかつたら、タイプとか……」

ぶつ！

勢いよく噴出したアシル。
え、何その反応！

「げほ、げほ、げほっ！」

「いるんですね。誰ですか、誰ですか？」

「いない！」

うそでしょ、とはやし立てたあたしに、彼は手元にあつた辞書サ
イズの本を落としてくる。
え、痛そだよそれはダメ！
すれすれのところによける。

「で、どうなんですか？」

今度は真剣に聞いたあたしに、コホン、とせき込むアシルさん。
うん、何かありそうだ！

Q 弱みを握つてみよつと思つただが……？

A、イイよ良いよ！　「いつの弱みは、好きな人だつ！」

第十四の題「心のやがな夜をお過いしか?」

「ないよ、ない。そもそも、いたりぬけられて、このくだりない、お父様による恋愛ゲームから一抜けさせてもらひつ」

もつともな正論だけど、あたしにはまだ漬け込む余地がある。

「……周囲に反対されそつな恋なんですか」

その途端、アシルはひきつった顔で、あたしに笑いかけた。

「何を言つて居るのかな、保崎さん」

「うーん、そうだと思うんですけど。違うんですか?」

「ち、違つといわれたら……反論できない自分がいるね……」

認めた。

少し違つ気がするが、認めたと同じ事だらつ。

「どんな方なんですか?」

もう後に戻れないと思ったのであるつ、アシルはしぶしぶ口を開いた。

「メイドだよ。元、下級貴族の」

「メイドさんかー。すばり、手こじたえはあるんですか?」

「てつ、手こじたえつ! ? わ、わからぬよそんなこと! -」

顔を赤くし、照れるアシル。

そんな乙女顔、しなくていい!

まあ、あたしならその恋、叶えてあげられる自信がある。でもそんなことしても意味ないしな……面白いだけで。そう思つてはいるが、アシルがピシ、と人差し指を立てた。

「そうだ。等価交換をしないか？」

「等価交換？」

「うん。僕は、両想いになりたい。好きあつていれば、お父様もさすがに許すと思うし。で、君は、早く元の世界に戻りたい」

梯子を優雅におひながら提案する、アシル。

「僕が両想いになれば、君は僕をハーレムの対象にしなくてもいいし、僕自身も利益がある。どう？　いい案だと思うけど？」

地に足を付けたアシルは、こまろと、ドヤ顔。

「どうする？」

最後に言われ、あたしはうなずいた。
有無を言わせない声だったしな。

「じゃあ、取引成立ー。明日、朝に、僕の部屋集合ね」

一礼をして、部屋から出て行つた。
にしても、こいつの好きな女の入つて、どんな人なんだろう。楽しみー！

「ぎゃーーー！」

あたしはその声で目が覚めた。
時計を見るとまだ夜の一時。つたぐ、なんの悲鳴だよ、殺人事件
でも起きているのかよ。

枕に顔を押し付けながら、しばらく考えていたけど、あれは多分
レイの声だ。ソウシに何をさせられてるんやら……。
答えが出て、よけいにすつきりした頭。これでは、当分寝れない
だろ。悲鳴はまだ続いているし。

「廊下に出るかー……」

ゆったりとしたパジャマ姿のあたしは、手元にあった懐中電灯を
手に取って、部屋のドアを開けた。

「わー……暗いー……こわー……くなんかないぞ」

悲鳴のよく聞こえる暗い廊下は、まるでホラー映画のワンシーン
だ。

その中で、一人たたずむ女人の人……うん、何かでそ。

「あーやダメダメ。夜風に当たって、早く戻ろう……」

そういうて、自分を元氣づけ、一步踏み出そうとしたとき

「何かお探しですかー……」

とん、と肩をたたかれた。

硬直しそうになる首に必死で鞭を打ち、あたしは後ろを振り向いた。

そこには、長い黒髪を無造作に伸ばした、メイドさんの姿。

「あ、あああああああああつ……。」

『一晩は、まだまだ続きます。』

Q、どうのうつな夜をお過いりか？

A、幽霊つ！ 幽霊が出来ましたああつ……。

第十五の問い「意中の人人は、誰か？」

「保崎さんつ！？ ビリした」

近くのドアから、心配そうなアシルがひょっこりと出でてくる。あたしは後ろに立っているメイドさん いや、幽霊を指せし、酸欠状態の金魚のように口をパクパクとさせ、アシルに助けを求める。

すると、なぜかホッとした表情になるアシル。

「…………ランドさん……夜は危ないと、言つてゐるでしょ？……」

「いえ、しかしランドは、ご主人様から命令を受けておりますので」

「いやかに話す一人。知り合いらし！」

「あのへ、ランドさん……ですよね？ 誰なんですか？」

すると、ランドさんは黒髪をバサッと振りながら、一いつ礼を振り向いた。

「ここ」のメイドです。ランドは物心ついたときからこの屋敷にお世話をなっています」

機械のような口調で淡々と話すランドさん。よく見ると、顔はすく整っている。

半分しか開いていないと思われる瞳に、薄い唇。白目の肌は、闇を反射している。パーザーとに描いていくと、病人みたいな感じだけど、おかげている位置は絶妙なバランス。

「あなたは 確か、『乙女ゲーオタクの変人』さんですね」
ぴきり。

「うん、確かに顔はひきつった。

「だ、誰からそんなあだ名を教え込まれたんですか……？」
「レイ様です」

「あんの、性悪男一つ！」

「ランドは、レイの専属メイドだからね」

「あの人は、嫌いです」

ランドさんは、アシルの言葉を遮るよつて答えた。

「性格が悪いのです。ランドのことを何度も何度も足蹴りにしやがつて、ランドがにんじん嫌いなのを知つてゐるくせに、ランチに、にんじんのソテーとか出してきやがるのです。その割に、自分が嫌いな魚をランチに出させなくしてゐるのです」

今までは機械のように単語として出てきた言葉だけじ、レイの悪口を言つてゐるときは、なぜか生き生きとしている、気がする。

「というわけで、今、レイ様が発していゝこの悲鳴ですが、ランドにとつてはざまあ見やがれこの野郎程度にしか思わず、助けるそぶりさえ見せないのです」

「あ、そうですか……」

何故、後半説明するよつたな口調だったのだろう……？

「といひで、アシル様、保崎様。お部屋に戻つてはいかがでしょう」

首を九十度に曲げ、ロボットのような恰好で聞く、ランドさん。その時、一瞬、アシルがさみしそうな顔をしたのを、あたしは見逃さなかつた。

「そうだね。早く寝ることにするよ。ランドさんも、あまり遅くまで徘徊しないでね。危険だから」

「ランドはレイ様の悲鳴が途切れるまで徘徊しています。お屋敷の中ですし、あまり危険はありません。ですので、早くお戻りください」

はいはい、と生返事をして、アシルはあたしの首根っこをつかみ、ランドさんと離れた。

「…………といひで、アシルさん」

「何かな」

「あなたの好きな人って、ランドさんですか？」

ぱ。

あたしの首根っこをつつかんでいた手が急に離れ、バランスを崩したあたしは、しりもちをついた。

「そ、そのことに関しては畠田、畠田へ、説明するよ。じゃあねつ！」

明らかに動搖しながら、アシルは近くの扉に入つて行つた。

「セイ、女子トイレなんだけどな……」

あたしのつぶやきは、一つの悲鳴にかき消された。

Q 意中の人は、誰か？

A、ラングさんだと思つよ。たぶん。

すっかり夜も明けて 、

次の日。

あたしは、パジャマ姿のまま、アシルの部屋をノックした。

「はいはー」

寝起き直後のような声がして、アシルが出てくる。

「えっと、やつそくですが、意中の人って、ラングさんですよね！」

「本当にこきなりだね……答えは 、 yes、かな……」

うーん、あの人を攻略するのか 、難易度がすごいな……。

第十六の問い「攻略方法は、あるのか?」

「と、言つわけで、『ランドさんの好みを探つてみよつー』の会議、第一回目の会議を始めます!」

あたしの持つてきた黒板を呆れた顔で見ながら、アシルが手を上げる。

「質問でーす。そのとんでもないセンスの名前を何とかしてもらえないでしょつか……うぐつ！？」

「そんな質問は受け付けません」

額に飛んできた黄色いチョークを拾い上げ、アシルが涙声で反論しようとしたが、あたしがチョークを構えたので、黙り込んだ。

「で？ 意中の人的好きなものとか、知らないの？」

「知らないよ。無防備にそんなこと聞いて、僕が好意を持つていると気づかれたらダメじゃないか」

「なんで？」

「メイドとの恋は、あまり普及されていないからね。むしろ、メイドのほうは遺産目当てだと思われがちだから、反対されるに決まっているし、最低、メイドは屋敷から出されるだろうね。それは阻止したい」

真剣な瞳のアシルに、あたしはくすりと笑う。

「…………っ、な、何！？」

驚いた表情をする。

「いや、本当に本気なんだな、って。いいね、そういう恋。あたしもしてみたいなー、って」

そんな一言で、頭を撫でて返事をしたアシル。

「ハーレムの対象の中から、好きな人を見つけてみたら?」「無理です!」

がば、と頭を上げたあたしに、びっくりしたのか、後退するアシル。

「あんな奴ら、友達でも無理ですよ。って、話を戻しましょう!とにかく、ランドさんの好きなものを探りましょー!」

慌てながら「じぶしを上げたあたしに、やさしく微笑むアシルさんであつた……。

Q 攻略方法はあるのか?

A、うーん、見つけてみたい!

「ラルー!」

「あ、いいところいました保崎さん。かくまつてください! ランドは今、追いかけられているのです」

とりあえずランドさんのところに行いつて部屋を出たあとは、スカートをうつとうじそうにしながら走る彼女に出会った。

「ラルー？」

「ランドの別の略し方です。ランドの名前は、ラルディードですの。とにかく、この部屋に入れさせてください」

答えを待たずに入ってしまったランドさん。

「つて、そこ、アシルさんの部屋ですか……？」

あたしは止めるが、鬼の形相で追いかけてくるおばあちゃんメイドをドアの向こうで見つけ、無理です、とでもいう風に指でバッテンを作る。

仕方がないので、あたしもすばやく部屋に入る。

そこには、顔を少し赤くしながらも、冷静を装っているアシルさんがいた。

「な、なんでここ！？ ビリしたんですか！？」

「昨日の鬱憤を他人にハッ当たりしようとしたレイ様に、暴言を吐いたのです。そうしたら、ミセス・ディカーが鬼の形相で追いかけてきたのです。お分かりですか、アシル様」

「わかりました……ちなみに、その暴言とは……？」

「『お前は同性愛者の弟による犠牲者の一人にでもなればいいのです』といいました」

そ、それはあたしでも怒るぞ……？

「ビ、ビンマイですね……。といひで、こつまでかくまえばよろしいのですか……？」

「別にいいです。ジエル様でも脅して、ビニが違うところとかくまつてもらいます」

セウコウヒ恋に距をかげたラングドセルを、見てて止める。

「ラングドセル……」一階ですよつー。

「一階へいらこじりつてことないのです。ラングドセルのへりこ骨折
しないで飛び降ります」

淡々とこうラングドセル。

「ダメですつーーー」

腰にしがみつくあたしを振り払つて、ラングドセルは恋から飛び降
りました……。

第十七の闇」「レイア質問」ナリベコベヒ墨ひへ

「……自由奔放な方ですね……」

窓の下をのぞき、ランダさん姿を見送つて、あたしはアシルさんに一言こいつ。

「やうですね……」

げつせつしてこるアシルさん。

「やういえば、なんでジユル君のところに行くんですか？　かくまつてもううな、ここでもいいのに」

「ジユルはランダの下僕的存在だからね」

あ、そういう意味かー。

納得したあたしは、アシルさんを引っ張り、部屋を出て行こうとする。

「な、なんだい！？」

「レイなら、ランダさん好みとか、知ってるかもしないじゃないですか」

「でもつ……」

なんだか腰が引けているアシルさんに、あたしは喝。

「いいからくるつ……」

「…………はー……」

今の女性は、まったく恐ろしい、などとぶつぶつ言っていた奴にけりを入れて、あたしはレイの部屋へと向かった。

Q 最終手段、レイに質問、かあ……うまくいくと思ひへ.

A、考えたくもない。

「レイーーー！」

ぱたーんと盛大に扉を開け入ってきたあたしとアシルに、レイは読んでいた本を落とし、びくりとする。

「なんなのよその反応は」
「いや……」

冷静になろうとしているのか、軽く自分の頬を叩きながら、レイは答えた。

「こいつらに今、自分の感情をぶつけようかぶつけまいが悩んでいた」

田の前にあつた花瓶から、花を抜き取る。

「え、保崎さん、さすがにそれは

ばっしゃーん。

花瓶の水をレイにぶつけたあたしは、満足げにうなづく。

隣で、アシルさんが顔を蒼くしながらあたしを見つめている。

「…………」

しばしの沈黙の後、

「やつやと出てけ、この雌豚ッ！　お前の顔を、一度と、俺の前に
やるくなッ！　いいなー？」

水をしたたらせながら、唾の飛んでくるような勢いでレイに怒鳴
られた。

あたしは反論しようとしたが、その前に、アシルさんに引きずられ、部屋を出て行つた。

「ばかですかあなたは！　あんなプライドの高いレイに、水をかけ
るなんて……ふざけるのもほどほどにしてください…」

ああ、パジャマ姿のまま、ついに外に出でてしまつた……。
ここは一面に薔薇が咲き誇る、薔薇園らしき。甘い香りと鮮やかな色が、癒し効果に抜群らしい。

「ふざけてないです。あたしは自分の感情に忠実なだけで……」
「それがいけないのです、それが！　ランドさんも見失つてしまつたし、これからどうすれば」「呼びましたか？」

頭を抱えたアシルの背後から、げんなりしたジェル君を引き連れ

て登場したのは、ワンドさんだ。

「ひひひ、ワンドさんっーー?」

「はい、ワンドです」

「ついたえるアシルさん。首をかしげるワンドさん。
それに」

「ほほほ、保崎さんもいらしたんですね…………」

顔を紙のように白くしたジエル君。

「こりしましたよ」

「こりと、営業スマイル。

ああ、なんだか大変なことになつそつ……な、予感……?

第十八の問い「必殺・二人きり発動。上手くいくと思つか?」

「立む話もなんですので、とにかく座りません?」

近くの、そつけないベンチを指をして提案したアシルさん。
その言葉にうなずき、それぞれ、思いのところに座る。

いや、これが肝心なんだよ。

今、アシルさんは両隣に人が座れる状態。その隣に、すかさずあ
たしが座る。

アシルさんの隣は一つしか空いていない。あたしの隣も座れる。
ランドさんは、果たしてどこに座る……。

「あ、このベンチイイね」

当たり前のように、素早くアシルさんの隣に腰を下ろす、ジェル
君。

「.....」

あたしは無言でジェル君をこらむ。

「!?」

何があつたのかわからない、という風な顔でこいつを見るジェル
君。

「何? ジェル君。あ、座つて座つて」

無言の圧力でジル君を黙らし、あたしの隣にランドさんを座らせようと/orする。

「いえ、ランドはただのメイドなので、ここに立つてこます
『いひつて。座りなよ』

ぐい、と腕を引つ張ると、やれやれ、といつ風な顔をしてから、ゆうくりと腰を下ろす。

「にしても、保崎さんはなぜにパジャマなのですか?」
「え? ああー……」

自分の服を見おろし、苦笑い。

「急いでいたから……」
「?」

「あ、気にしないでください。保崎さんにものるこあるんですよ
ー」

密会していた内容を話されたら困るアシルさんは、一人で会っていたこと」と隠し通す手段に出たようだ。

「そうですよ、服がジャージしかなくて~」
「え? お部屋にドレスが置いてあつたはずですが」
「ドレ……っ!~?」

マジか。部屋に戻つたら確認しよう。

いつもしないと、ドレスを着る機会を逃してしまつ。

人生に後一回、あるかないかの機会だ。これを逃したら、あとで後悔するだらう。

その時、ピーン、と、いい考えが浮かんだ。

「アシルさん」

近くで耳打ちをする。

「一人きりになつてもらいます。この機会、逃したら後悔しますよ」「…………っへ！？」

返事を待たずに、あたしは立ち上がる。

「それじゃあ、着替えてこようと思いまーす！」

そして、腕を伸ばし、ジエル君の手をつかむ。
気合が入つて、少しばかり、強くつかんでしまつたけど、大丈夫
だろ。

「つ……！？ 痛いです、離してください、アレルギーが出るんですう——つ——！」

鋭い悲鳴を耳元で叫ばれるが、頑張つてスルー。
うう、どう技摸放れそう。

「じゃつ、そういうことでー。」

涙声で叫ぶジエル君を誘拐し、アシルにワインクをして、その場を去つた。

「つかやつてくれるかな、アシルさん。」

Q 必殺・二きり発動！ うまくいくと思うか？

A、必殺だから、うまくいってほしい……。

第十九の問い「何故、女性が嫌いなのですか？」

アシルさんから離れて、数歩歩いたとき。
あたしは、重大なことに気が付いた。

「いつも、逆ハー作るチャンスじゃん！」

そう、今はジェル君と二人きり。こんなチャンス、めったにないぞ！

と、言うわけで。

「ジェル君」

急に振り返ったあたしにビビリながらも、ジェル君は「はひつ！？」と返事。

「あのさあ、いつから女人、苦手なの？」

うん、まずはこのことを知るのが先だ。なんで嫌いかは、ただ単に、怖いだけだろう。前にも言ってたような記憶があるし。

「いつからって……十年ほど前ですかね？」

遠い目になつたジェル君は、話してくれた。

Q なぜ女性が嫌いなのですか？

A、……下を読んでね！

「小さいころ、よくはラングさんと一緒に、遊んでいた覚えがあります。それも、一度や一度ではなく、頻繁に。その時はまだ、女性恐怖症ではありませんでした。

そんなある日です。ランナさんが急に、何かを僕の目の前に見せてきたんですね。

「、それは、

涙声で話すジエル君を見て、あたしも「くりとつばを飲み込む。

「それは、蛇の抜け殻なんですね——つー！？」

あああー、と泣き崩れるジユル君。そうと、過去のことを鮮明に

ても 虫の扱い荒なんて あたしはひひひなし 触ることもで
きる。

何が怖いのだろう？

「彼女はつ、僕が爬虫類全般的に無理なのを知つて、見せて来たんですね……」計画犯罪です！死刑にでもなれです！最悪です！それから僕は、女性を見るたびに、ランドさんが持ってきた蛇の抜け殻を思い出すようになつて……怖くなつたんで

な、なんでそこから女性嫌いになる！

「ラングさん、同僚のメイドさんに話しまくったんですよ、その

「ことを！僕は一時期、屋敷中の笑いものになつて……女性の情報網は恐ろしいです！」

そして、あたしの顔を見ると、

卷之三

アホな——死ね——

あたしの顔を指さして悲鳴を上げたジエル君の足を踏みつけ、ふんと鼻を鳴らし、顔をそむける。

「最悪ですね！」

と怒鳴る。

「最悪なのはそっちだ！乙女の顔を指をして、蛇だあ！？寝言は寝てからいいな！ あと、ランデセルにだけ恐怖の感情を抱けよ！」

「いや、彼女は特に怖いですよ」

何のフオロード！

「とにかく、ここには女性嫌いを克服しないといけないみたいだよね……」

にやりと黒い笑みをしたあたしに、ジエル君はひいつ！？ と顔を白くした。

「アシルさんのミッションに加え、ジェル君の女性嫌いも克服させ

なことね！」

ああ、やる気上がつてきた！

第十九の問い合わせ「何故、女性が嫌いなのですか?」(後書き)

お気に入り小説登録件数が、百を突破しました!
みなさん、ありがとうございますー^-^

第一十の問「二角関係はお嫌いですか？」 1

場所は変わり、アシルとランド。

「……行つてしまつた……」

呆然と秀名がいた場所を見て、ポツリとつぶやくアシル。
その隣から、心配そうな顔のランドが、はてなマークを出す。

「あ、ランドはあの二人を追いかけてきます」

ランドが走り出そうとして、アシルは、つい、とつさに腕を
つかんでいた。

さあ、とランドの長い黒髪が揺れる。
それに見とれていると、不機嫌そうな顔で、「なんですか?」と
聞いてきた。

「あー……イヤー……」

小首をかしげたかわいらしげぐせで、アシルは、つい、心の中
のことを言つてしまつた。

「えーっと、あつと……その、好きです!」

「何を言つているんですか。からかわないでください。ランドは追
いかけます」

普段と変わらず、いや、普段より機械的な声で即答され、アシ
ルは彼女を追いかけるのを忘れていた。

「それで今、魂が出ているんですね
「わかつてよ、保崎さん……」

胸元にお花が付いているだけの、膝丈のシンプルなドレスに身を包んだあたしは、アシルさんの魂を捕まえようとしながら、ため息をついた。

数日前、ドレスに着替えたあたしが、ジエル君の女性嫌いを直そうという計画を立てていたとき、急にドアが開き、アシルさんが口から魂を出しながら、いきなり部屋に入ってきたのだ。

「…………それで、保崎さん……望みは…………
「ないです」

即答をしてしまったあたしは、さらに顔色を悪くしたアシルさんに気付き、慌てて付け足す。

「いや、あくまでもあたしの意見ですよ！？ ほら、本当に冗談と思つたとか」「ないですよー。即答はないでしょー。それに、答えたときの声が感情は言つていませんでしたし…………」

ネガティブ・シンキングなアシルさんにあたしはチョップ。

「…………な、何をするんですか！？ 痛いですよー！？」

魂を一気に吸つたアシルさんは涙目であたしを見て、怒鳴る。

頭を痛やうに抱えてこなけど、そんなに痛かつたのだろうか？

「ネガティブですよー。もつとポジティブに行きましょうー。ほひ、
『僕とラングさんは両想いだー！』」

その途端、顔を赤くしたアシルさんは慌ててあたしの口を押える。

「じ、実名出さないでくださいー！ もし誰かにバレたら、大変なことになるんですけど、何度も言つたでしょー！」

あーもうでした。

にしても、ラングさんから何か、聞いたほうがいいかな？

「あ、アシルさん。あたし、ラングさんに探り入れておきますねー！」

高じヒールに苦戦しながらも、あたしは駆け出した。

「つひ、ちゅーー！」

背後にアシルさんの声が聞こえたが、あたしは無視してドアを開ける。

すると、田の前には、ラングさんとジエル君の姿。

いや、せよとんとしているラングさんと、顔が真っ白で、ラングさんに抱がかれている、ジエル君。

「あ、すみません。開くとは思こませんでした」「こ、こちらこそめんなさい。それより、これほどひつたんですか？」

あたしはジエル君を指さす。
まるで、さつきまでのアシルさんだ。

「いえ、確保しただけです。それでは」

た、と地面をけろりとしたラングさんの腕を、つかむ。
うん、いろいろと聞き出そう。

にやっと黒い笑みをしたあたしを見て、ラングさんは何かを察知
した ようだった。

Q 三角関係はお嫌いですか？

A、ノーロメント

第一十の問い「二角関係はお嫌いですか？」 2

「んじゃあ、ランドさん誘拐してこきますねーー。」

がし。

ランドさんの腕をつかみ、連れ去るつとする。
が、殴られたり蹴られたりと、強烈な抵抗をされる。

「…………何してるんですか…………？」

あまりにで一ぱすぬあたしに、心配したジエル君が聞く。

「大丈夫さ！」

きりりと歯を光らせかっこよく囁つて、ランドさんの足を払う。
予想外のことだったのか、バランスを崩したランドさん。
その隙に、あたしは引きずつて、拉致を成功させた。

「つ、なんですか、保崎さん！ ランドは、やましい」とばれて

いません！」

「ちよっとカミングアウトしたよね」

ぐ、と舌葉を詰まらせる。

「そ、そんなに、アシル様のおやつを食べたこと、重要なんですか

……？」

小つちやいな！

「そんなことじやなくて。ラングドセル、アシルさんの告白、断ったよね」

あたしが聞くと、す、とラングドセルの顔から表情が消える。

「ラングさん、思いの人、とかいるの？」

「いません」

機械的な声が響く。

「ふーん」

「いません。いないです。いないつたらこません！」

ムキにならんラングさん。

赤面しているから、きつとこるのだろ？

うん、恋する乙女はかわいい。

「えー？ 言わなかつたら、アシルさんのおやつ、食べたことわづ

ちやうけど、いいのかなあー？」

「別にかまいません。仕方のない」とです。

「えーっと、何だつて、あのメイドさん そつだ、ミセス・ティ

ガーに言つちやうね」

ぐ、ど黙り込んだラングさん、ヒジめの一撃。

「ちよおー怒られるだろ？ 『ラルーツツツ……』みたい
な？」

怖い顔でランドさんの名前を呼ぶと、効果てきめんだつたよつだ。

「うう……い、言こまですから、誰にも告げ口しないでくださいよ……？ 好きな人のこともそうですか？」

仕方がない、とでもいう風にため息をつく。
それから数秒後、覚悟が決まつたのか、顔を上げる。

「誰で？」

言つちやつたー、と顔を隠すランダせん。

ええええええええええつつつつ！！！？？？

あたしの怒鳴り声は、屋敷中によく響いた。

Q 三角関係は嫌いですか？

A、いや、ゲームの中とかでは好きなんだけれど……。

秀名の悲鳴と、

「アラバマ」

ジユルのかわいらしさはくしょんが、見事に重なったのは、後日、
わかつたことだ。

第一十の問「三角関係はお嫌いですか？」 3

よ、よくわからない事態になつてしまつた……。

あたしは混乱した頭を整理するために、図書館にいます。数冊のラブロマンス小説を傍らに、部屋に置いてあつた紙と筆記用具を机の上にひらべ、頭を抱える。

「…………まずは、アシルさんがラングさんのこと好きで」「

何も書いていない紙に、アシルさんの似顔絵を描いて、ハートのついた矢印を隣に描き、そこからラングさんの顔を書く。

「ラングさんは、ジヨル君のことが好き」

ラングさんの隣に、先ほどと同じような矢印を描き、すぐ近くにジヨル君の似顔絵。

ジヨル君の矢印を描こうとするが、わからないのに気が付いて、ボールペンを置く。

「…………面倒くさい事態だ……」

これ以上、アシルさんに期待はさせとはいえないのかもしない。

「言つか…………？」

頭の後ろで手を組み、椅子の背もたれに深くかけたとき、あたしの体に、誰かの影が重なつた。

その影は手を伸ばし、机の上の紙を手に取る。

「ふーん……こんな三角関係があるなんてねエ……まさか、君の妄想とか言わないでよ?」

顔を上げると、そこにピンクの花が胸元についたエレガントなドレス姿のソウシが立っていた。

つて、一番教えちゃいけない人物だよ! 愛するお兄さんが作る三角関係の中心のランドさんを、排除するに決まってるよ! -

「や、ソウシ! - 返してよ! -」

手を伸ばすが、一応男子のソウシには手が届かない。
ぴょんぴょん飛んでみるが、ひよいひよいと軽くかわされる。

「…………つ…………! うつぜえ…………」

「なんか言つた? にしてもドレスなんて、自分の外見分かつてんの?」

「わかつてます! 用意されてたんだから仕方ないじゃない! -
「…………猫に小判…………いや、豚に真珠だね」

ふん、と鼻で笑つソウシに、あたしはアッパーを食らわす。

「…………ツー?」

不意打ちを食らつた彼は、無様に倒れこむ。
勝利を勝ち取つたので、ひよい、と手元から紙を奪う。

「あ。そーだ! ソウシ、利用していい?」

満面の笑みを浮かべ、目線を合わせて「あたしに」と言。

「キモい。近寄るな」

その日、異世界から来た人を図書館に入れると悲惨な事態が起じたと、都市伝説ができたらしい。

「……昨日、すこしく大きい音がしてメイドが図書室に入つたら、ソウシが気を失つて倒つて聞いたんだけど、なんか心当たりとか、あるの?」

アシルさんの部屋で作戦会議をしていると、眉間にしわを寄せ、彼が聞いてきた。

「いえ?」

昨日と同じ満面の笑みで流すと、アシルさんは納得したよう、読み物に戻った。

「うーん、また読んでる、『Q 猪瀬でハンバーガーは食べれるのか?』。そんなにおもしろいのか……?」

「とにかく、そのポケットから出ている紙はなんだい?」

指差したのは、あたしのポケットからちゅうっびり飛び出している紙。
あ、これは……。

「いえ、何でもありません!」

クシャッと丸め、背後に回そつとしたとき、ぽろ、と手から落下一しまった。

それをすかさずキャッチしたアシルさんは、あたしに取られない
ようにすぐさま伸びし、

見てしまった。

Q 三角関係はお嫌いですか？

A、ひ、昼夜ラ状態の予感！

第一十の問い「三角関係はお嫌いですか？」 4

見られてしまった。
最悪な事態、発生中です。

「Hマージョンシー！」

Q 三角関係はお嫌いですか？

A、いやですううつ！

あたしが書いた紙を見て、少し顔色を悪くするアシルさん。
ああ、天然の威力を使ってあたしの妄想だと思ってくれーっ！

「……保崎さん……」

田を開じ懺悔するあたしに、うつろな田のアシルさんが聞いてくる。

「これ、本当なんだよね……」

あたしのへタな絵を見て、手を震わせる。
なんて答えたらいいのかわからず、あたしはどうあえずうなづいておく。

「……三角関係といつ」「……？」

「……なんで……ジエルは昔つから、ただのいじられ役だと思つて
いた……」

「……なんで……ジエルは昔つから、ただのいじられ役だと思つて
いた……」
それは、好きな子をいじめたいといつ小学生的思考なんぢやない
ですか？
そんなことを言つたら火にガソリンを入れるみたいなことになる
ので、飲み込んでおく。

どうしよう、これでアシルさんがラングさんをあきらめたら、あ
たしが彼を攻略しなければならない状態になつてしまつ……。
あたし、自慢じやないけど、天然に萌えはするけど好かれる自信
はないんだ！　あ、何キャラでも好かれないか。一番好かれないの
はつて意味ね。

って、だつたら半永久的に元の世界に帰れねええーっ！

「あの、アシルさん、まさか、あきらめたりしないですよね……？」

顔を下げたまま上げないアシルさんに恐る恐る声をかける。
例の告白のこともあり、今、アシルさんは不利な状態だ。
この状態でラングさんを振り向かせるのは、結構難しい。

「でも、あたしに任せてくれ、ちゃんと両想いに」

その途端、急に顔を上げたアシルさん。
びっくりして、あたしは半歩後ずさつた。

「もういいよ」

やうこつてこいつと笑った彼の目は、疲れ切っていた。

もうこー なんて、本当に思つてこるのか ？

「ちよっと……」

顔を下げるあたしに、びくつとするアシルさん。

「恋愛ゲー達人のあたしに、攻略できな『キャラ』がいるともお思い…？」

急に高飛車な態度になつたあたしに、今度はアシルさんが半歩後ずさつた。

「何でもやつてみるわよー。顔だけはいいんだから、あたしに任せなさい！ ジェルが何よ、あんなのただのビビりじゃない！ ステータス的にはアシルさんのほうが上回つてるのー。そんな弱気になるなあー！」

啖呵を切る。

その剣幕に、きょとんとしていたアシルさんだが、やがて肩を震わせながら笑い、あたしの手を取つた。

「…………くす……じゃあ、頼もうかな……？ 恋愛ゲーの達人さん？」

目に浮かんだ涙をぬぐつ。

うん、悲しい涙じやなくて、笑い涙のほうが、流すなんなら気持ちいいよね、見てるほうもー。

「それじゃあ、一から始めよう、ランダさん攻略！」

まずは、何でジエルを好きになつたのか、と、ジエルは誰のこと
が好きなのか、聞き出そつ！

第一十の問い 「三角関係はお嫌いですか？」 5

ジヨル発見。

図書館の前にて、ターゲット標的確認。

いや、出陣！

「ばあああああああつっ！」

「うわあああつーー？」

背後から大声を出すと、あつけなくビビるジヨル君。
うーん、ヘタレにしか見えん……。

「さあ、楽しい尋問の始まりだよ…………？」

Q 三角関係はお嫌いですか？

A、え？ 誰がそんなこと言った？

「さあ、ジヨル君の好きな人はつーー？」

田の前には、大きな本棚、高く積み上げられた、異国語の本。
そして、お手軽サイズのライトと、かつ丼。

「……な、なんでそんなこと聞くんですか……」
「だって、気になるんだもん」

唇をとがらせていうあたしは、かつ丼のおいしそうな匂いに負け

る。

「食べていいく？」

「別に……どうでも……」

許可をいただいたので、早速食べ始める。でも、目的も忘れない。

「さて、ジエル君の好きな人、暴露しちゃつとよ」「ぼ、ぼくの好きな人……」

それだけで顔を赤くするジエル君。

「も、早く言つちやつてよ。この回でいろいろ進展させるつもりなんだから。第一十の問い、どんなだけ続ける気？」

「そ、そんな」と、知りませんよ……」

腰を引きながらも反論するジエル君に、あたしはキレたふりをする。

机をたたき、こりみを利かせ。気分は学校に行かない不良。

「あ、？ 早く言えつひとつてんでしょ？」

これは効いたらしい。涙目で、ジエル君が答えます、答えますーー！ とわめく。

……といつか、みんな、恋愛してるじやん。あたし、必要なくね？

「その……ラングさんです……僕が好きなのは……」

その途端、あたしはラングさんに、何も聞くことなくなつた。

両想いだ……それなら、なぜ好きなのか、聞くことは、意味がない……。

何もできない、手出しができない無力さに、なんだか視界がにじんできた。

「…………アシルさん……」

部屋に入るなり、泣き出したあたしを、慌ててアシルさんが迎え入れる。

すび、と鼻水を勢いよく吸つて、あたしはさつきのことを話した。

ジヨル君とラングさんがあ想いなんだつていうこと。それから、ラングさんには何にも聞いていないということ。

それを話し終わると、今度は嗚咽が漏れてきた。

ひく、ひく、となんともまぬけな嗚咽を漏らしていくと、アシルさんが、笑つた。

「…………な、何で笑うんですか……、本当ほ、泣いていいはずなんですよ……」

「いや。僕の代わりにたくさん泣いてくれたからね……ありがとう。協力に感謝するよ」

そういうて、アシルさんはあたしを抱き寄せた。

いきなりの意味不明の行動に動搖したけど、ぽんぽんと頭を叩いてくれているので、小さい子をあやす感覺なんだろう。

その気持ちに甘えて、あたしはしばらく、抱かれていた。

「……別に、あいつは逆ハー目的でここに来たんだ……おかしい光景じゃないだろ?……」

動搖を隠せない様子でドアの外にいるのは、レイ。
いつたい何が嫌なのか、何に動搖しているのか、わけがわからな
い。

ただ、ただ、アシルの胸の中で泣いているあいつが、少
し本当に少し、かわいいと思つた。

「ああもう、どうしたんだ俺!」

それぞれの思いは、食い違つ
…………?

第一十の問「三角関係はお嫌いですか？」

5（後書き）

なんだか恋愛ものって感じです

恋愛小説つてことを忘れていた星野です

第一十一の問題「三角関係、決着つづか?」（前書き）

今日は長いです……＾＾；
すみませんゝゝ 前後編に分けようと思つたんですが、第二十の問
いが長引いたので……

第一十一の悶に「三角関係、決着つく……か？」

結局、アシルさんは、あたしが泣きやむまで抱いていてくれた。上からしづくが垂れてきたけど、あたしは空氣の読める子なので、言わないでおく。

「…………それじゃあ、アシルさんは、これからどうします……？」

何とか落ち着いたあたしは、アシルさんに聞く。

「うーん……とにかく、あの二人は両想いになつてほしいな」

そうだろうね。自分はあきらめるんだもん。

「にしても、女性恐怖症のジェル君が、なんでランドさんを好きになつたのかな……？」

「ああ、そういえばそうだよね……」

一人で頭をひねつていると。

とんとん、と軽いノックの音がして、振り向くとつまらなそうな顔をしたショルが立っていた。

「何一人でラブシーンやつてんだと思ったら、いきなり頭ひねつて……君たち、一体何やつてるの？」

ちよつといい！　ここにジール君のこと聞く！

「ねえねえ。ジェル君の好きな人、知ってる？」

「ランドさんでしょ。双子は自然と分かつちゃうからね」

つまらなそうに答えるシェル。
面立くなー！

四
七
七

「じゃあ、なんで女性恐怖症なのに好きなの？」
「あいつの女性恐怖症、最初は嘘だつたからだよ」

..... ?
..... ?
..... ?
..... ?

「あいつは女性恐怖症と嘘をついて、ランドを、なぜか一緒にいる、特別な存在に仕立て上げたんだ。だけど、そのうち、本当に女性恐怖症になつて……今のとおりさ」

後半、肩をすくめていうシェル。

「そ、そ、う、な、ん、だ……兄、弟、で、も、氣、が、付、か、な、か、つ、た、」

少しショックを受けたアシルさん。

にしてもこの双子は……一人そろつて小悪魔かよ……。

「あの二人、両想いなんだよなー。さつさとくつついてほしいんだ

「セーヴですね……アシルさん……わ、強制されちゃうのかな……」
〔ハントロール〕

•
•
L

え！？ と声を上げるアシルさん。

にやりと笑い、あたしは朗らかに部屋を出て行つた。

「あ、レイ」

部屋を出て少しだけ、あたしはレイを見つけた。

ପାତ୍ରବିନ୍ଦୁ

そういうて、無理やり腕をつかむ。

「さつー? あー、離せー。」

あなた、協力して

おもひととしたレイに、あたしはいたずら笑いを浮かべた。

Q 三角関係、決着つく……か？

A、つかせる！

「ねえ……話つて何?」

あたしからちょいビニールの上りで、冷や汗をかきながら
聞く、ジェル君。

「ジユル君、ランデさんのこと、好きなんでしょ……？」

しどろもどろなジエル君に、あたしは喝。

「正義の女神」

「ま、また？なんか『ジヤヴュ』……す、好きだナビ……？」

そういったのを確認して、あたしはある名前を呼ぶ。

「だつてー。レイ、ラングさん」

ジーハル君が、慌ててあたしが声をかけたほうを向く。
そこには、あきれた顔をするレイと、いつもより顔が赤いラング
さん。

「あとは任せるね」

そういって、その場を離れる。
これがどうなるかは、この一万人次第だからね。

第一十一回題ご「ひとつあるべく、死んでくれないかな?」（前書き）

最近、忙しくて更新がおろそかになつてこます。
期末もむづくですしどうぞ、すみません^v^

第一十一の題に「とつあえず、死んでくれないかな？」

ラングさんとジーハル君がようやくべついた次の日。

二人はすぐにお父さんに報告をしに行つて、数時間の討論（口げんか？）をしたのち、公認されたらしい。

あたしはその場にいなかつたから、あくまでも噂だけね。

それから、アシルさんは手伝ってくれたからと言つて、あたしの逆ハ一人目と偽つてくれた。

そのことを言つた時、失礼な長男はびっくりし、ウザい三男はアシルさんのおでこに手を当て、熱がないか確認し、小悪魔いや、閻魔様の四男はさみしいよーと言いながらあたしに抱き寄ってきて、さりげなく胸のサイズを再確認し、常識人の五男は祝つてくれ、男ダイスキ、お兄様ダイスキな六男はあたしにドロップキックをかます。

そして、あたしの雷が落ちたわけだが、まあそのことは省略しちう。

とにかく今は夕方。部屋に戻つたらおやつが用意されていると想うから、部屋に戻ろう。

図書館にいたあたしはそう思い、気に入つた本二、三冊を抱え、部屋を出た。

その時。

「あつ！ 保崎さま！ 待つていました！」

部屋を出たあたしに歓喜の悲鳴を上げたのは、長い廊下の先までずらーっと並んだ、メイドさん、兵士さんなど、屋敷につかえてい

る人たち。

「な、なんですかっ！？ 何も悪いことはしていないと思いますけど……」

「違います、保崎さま！」

列の一番最初にいた、パーティールの元気な、あたしと同じ年、あることは少し年上のメイドさんが、キラキラおめで祝您をする。

「あなたはミカ……あれ？ ミト？ フーん、ミト……？ だつたかの恋を、熟しましたね！」

「…………ミルさんですか…………？」

「ああ、やつです！ そんな名前！」

ミルさん、よっぽど影が薄いんだな……。

そんなことを考えてみると、列の一番田の、大人の色氣ふんふんのメイドさんが言葉をつづけた。

「セリ、ランデとジユル様の恋も応援したとか！」

いや、あたしは最初、アシルさんの恋を応援していいですね……。

そんなことを言ひつか言ひまこと考へていたら、その後ろの、三十代くらいの女性さん。

「しかも、そのお顔でアシルさまを攻略したとか！」

おこ、「そのお顔で」は余計だッ！

「そ、それが一番不思議ですわ！」

また、最初のメイドさん。

その言葉はどんどん広がっていき、列に並ぶ人たちが全員、口々にそうそ、とうなずく。

ああもつ……。

「…………うるさいーーーッ！」

腕を振り上げ思いっきり怒鳴ったあたしに、廊下はしん……と静まる。

「あたしが攻略しようがしまいが関係ないでしょ！？ 相手の勝手よ！ それに、あたしは好き好んでみんな性悪兄弟にハーレムされたくないわよ！」

その時、あたしは、背後から出てきた一人の人物に頭を叩かれた。思いがけない襲撃にビビったあたしだが、やられたらやり返せといつ言葉を思い出し、後ろに向かつて肘打ち。

「…………！」

すっとんきょうな叫び声を上げたのは、

「レイツ！？ なんでいるの？？」

「お前の出待ちがいるということを確かめに来たら、また懲りなく俺たちの悪口を言つているのを聞いたから、頭を叩いてやつたら、これだ」

おなかを抱えて苦笑するレイ。

少しあは悪い」としたかな……？　と思つてゐる。

「あ、今日のおやつはカロリー、ゼロのゼリーな。それ以上太ると、
屋敷が崩れそうだからな」

あたしの笑いとともに、レイの体は宙を舞つた。

Q　とりあえず、死んでくれないかな？

A、うーん、いつそのことあたしが殺つてもいいんだけど。

第一十一話 「カルチャーショックの先で……？」

「つたく……あいつ、馬鹿じゃないのか…………？」

怒ったように早歩きで廊下を颯爽とわたるレイ。そのルックスからか、近くをすれ違うメイドが黄色い声を出す。いつもなら不愉快になることだが、今はすでに不愉快 またはそれ以上 なので、あまり気にはならなかつた。

「……本当にイラつく……」

イライラと口元を下げながら、思わず心の中の感情が口からこぼれ出た。

独り言など、今まであまりなかつたのだが あいつが来てから、目立ってきた気がする。

今だつてそうだ。不快な気持ちを外に吐き出した。誰かに愚痴ることでもなく。

「意味わかんねえ……」

不快ではあるが、何とも言えない感情に、いらだつ。

異世界から来た、どうでもいいただのオタクに、どうも、自分の感情を左右されていく。

言つまでもなく、レイは恋愛感情など、今まで一度も感じたことない、恋愛初心者なのだ。

そんなレイの心境をよそに、秀名は午後のティータイムを満喫中

。

「あ、おこひーー！」

田の前に並べられた宝石のような一口サイズのゼリーを口に運び、あたしはほっぺたに手を当て、思わず一言。レイを殴った後は何事もなく部屋に戻り、『カロリーゼロのゼリー』を早速食べ始めたのだけど、なんだか罪悪感ひとつあり、後悔？

だって、一応あいつも攻略するんでしょ？ こんなに自分の高感度下げまくりじゃ、元の世界に帰るのが遅くなっちゃうよ。軽いカルチャーショックになつているあたしには、それは結構痛い。

「……決めた。本格的に攻略しよう。まずはレイからだね。さつきのこと、謝らないと」

決意を込めた拳で机をたたくと、机の上のゼリーがブルンと揺れる。

今のあたしには、それさえも応援の形にしか見えなかつた。

「よひ、レーイー！」

朗らかな笑顔でノックもせずに部屋に入ってきたあたしに、レイは心底びっくりしたみたいだ。

「おま……ッ……！ 何しに来たッ！？」
「つづー、折角来てやつたんだよ？ 少しあは喜んだら？」

「どうやらへんに喜ぶ要素があるといふんだ、このオタク！ もう一度聞く、何しに来た」

「あたしはあんたら六人攻略しに来たんだよ？ 理由なんてわかりきつてるくせに」「

唇をとがらせて言うあたし。

レイは少し動搖して、「う……」とうなつた。

「まあ、軽いカルチャーショックのあたしは、早く元の世界に戻りたいのだ！」

「カルチャーショック！？」

田を見開きびっくりするレイの反応に、あたしは思わず腰を浮かべる。

「なんで早く言わないんだ！ 無理にでもお父様に言つて、いや、怒鳴り込んで、帰らせてもらえ！」「

そこにあたしが嫌いだから 　　といつ感情は全くなかった。
ただ単に、あたしが心配なんだ。でも、強くつかまれた手には、さすがのあたしでも動搖する。

「ちよっ、レイ！？ 腕、つかんでる… 痛い痛い！」「

「……ああ、すまない……」

ぱ、とあわてて手を振りほどくレイ。

「あたしは大丈夫だから、心配しないでね。あんな啖呵切ったんじや、戻りたくても戻れないから。あ、じゃあ、あたしもう行くね～バイなら～」

心配せぬこよひ、わざとくらへりしながり部屋を出る。
バクバク言つてゐる心臓は、素直だなあ……と、思いながら。

Q カルチャーショックのその先で……?

A、べ、別になんもなつてない！

「……何が心配するんだ、あの馬鹿」

第一十四回の畠山「恋ひてなんじょい？」

「だあああああつつ……」

ばふん！

あたしが投げつけた枕は、豪華な部屋の壁にぶつかり、あたしのほづに戻ってきた。

ゆ、優秀な枕……！

「じゃなくて！」

顔が熱い。

焼肉とかしているときによく火照る暑さではなくて、内面から吹き出でくるような暑さ。

この暑さの正体は、知らない。もちろん、原因も知らない。なので、止める方法も、知らない。

「な、なんか冷たいものでも飲もう……」

そう思つたあたしは、食堂に向かつた。

「あ

一つ目のセリフは、語尾にオンプを付けた形が正しい。
「こいつは悪々しい遊び人、クロード……。

いつもならだらしなく伸ばしている茶色い長髪を縛り、背中に流している。

「これから逢引だからね。でも、秀名ちゃんにおじやべりもしたいなあ……」

キラキラが飛んでそうな顔で、吐き気がするような甘いセリフ。
あたしは横を向くと、口を押える。せつと顔は青くなっているのに
違いない。

「吐き気がするセリフをビートモ
釣れないなあ……面白くないぞッ」

つまりなぞうひきぼを向いたクロード。

「別に面白くないといいんですけど」

シャンデリアの光を受けて光っている冷蔵庫を開き、中から500mlココットルの水を取り出す。

「いいなあ。おいしそうだね。飲み終わったら頂戴ね
「誰があげるか、ばーか」

満面の笑みで返す。

すると、クロードが何かに気が付いたかのように、あたしに顔を近づけた。

一応クロードもイケメンだからね。ドキッとします。

「なつ…………何…………ツ！？」

「いや、なんか顔赤いなーって」

「なんのこと！？」

知らんぷりをしよう。

水を顔の前にやり、シャットダウン。

「…………どうしたの？ そんなに顔が赤いの、もしかして、秀名ちゃん、恋しちゃったかもよ……？」

「…………！」

よつ赤面したあたしの反応が面白かったのか、小さく吹き出し、クロードは「遅れちゃうからね」といつて、食堂を後にした。

「…………ツ…………」

あとに残されたあたしは一人、ぺたんと床に座り込んだ。

Q 恋つてなんでしょう？

A、未知の世界です。

第一十五の題に「女装男子とは仲良くなれそつか?」

『恋しかったのかもよお~?』

何回もコンピューターする、クロードの言葉。

「あああっ! もうここにこつてのー!」

あたしは頭の中から奴を追い出し、水を一気に飲み干す。もう、顔の熱さも引いている。……と、思う……。

「にしても、あたしは誰に恋をしたんだ……?」

この顔が赤くなる前にあつていた人物。クロードを追い出した頭に、新たに登場したのは、レイ。

「ないないない! 絶ええつ対ない!」

「つるさいんだけど」

頭を抱え振り出したあたしに一言呟つたのは。

紫色の膝丈ドレスに身を包んだ、男

女装男子、ソウシだ。

「……え、何しに来たの、ソウシ」

「何でもいいだろ。っていうか、僕の名前、気安く呼ばないでくれる? 僕の名前は、男の人に呼んでもらつたためにあるんだから」

どんだけ必要性のない言葉なんだ……！

「顔に出でるよ。つやれこみ」

そう言つて、近くの食器棚から「コップを、冷蔵庫から飲みかけのソーダのペットボトルを取り出す。蓋を開けようと、手をかける。

「ふぐつ……！」

どうやら、硬くて開かないようだ。
童顔の、女人にも見える顔を真っ赤にし、気合を入れて回そうとする。

「……開かないみたいだね」

「つむさい」

「そういうえば、炭酸が抜けるからってペットボトルのキャップをきつく締める人、いるよね！」

「あるあるネタ披露しないで、あけろ！ アシル兄さん攻略した恨み、キャラにするから！」

……こいつの恨みつていうと、夜中に藁人形持つて神社に行く姿が思い浮かんてしまつ……。

じ、人生の危機ッ！？

あたしはソウシからペットボトルを取り上げると、死に物狂いで回す。すると。

しゅわあつ！

ぶしゅうつ！

「一つ目は、蓋が開いた音。

二つ目は、ソーダが勢いよく噴出した音。

もちろん、そのソーダは噴水のように、蓋を開けたあとと近くで覗き込んでいたソウシに降りかかる。

「…………」

ソーダを髪や服から滴せながら、お互にを見つめ合ひ」と、数秒。

「…………ふつ…………！」

「…………くつ…………！」

ついでに「うえきれなくなつたあたしたちは、お互にを指さし、吹き出す。

「お前……ソーダ降りかかつてす」「こ」とになつてゐるよ……？　あれか！？　水も滴るいい男つてヤツか！？　お前に一番遠い言葉だな、おいッ！」

「お前こそすごい状態だよ！　服、薄い素材じゃなくてよかつたな！　まあ、透けてても色氣のかけらなんてないんだけどな、おいッ！」

「！」

「今悪口聞こえたけど」

「それはこっちのセリフだ」

しばらく笑うのをやめ、にらみ合ひ。

しかし。それも持たない。ソーダ降りかかつたアホな光景見て、誰が笑われずにいるんだ。

また吹き出したあたしは、お腹を抱え、倒れこむ。

汚いとかは思わなくて、ただ単純に、冷たくて気持ちよかつた。

「あー……笑つた笑つた……」

隣でとす、と音がしてみてみると、すぐそばにソウシが寝転がっていた。

「……なんか知らないけど、楽しい」

「ふつ……そうだね」

あたしたちはソーダまみれの中、何もせずに、ただ、天井を見つめながら、そうしていた。

Q 女装男子とは仲良くなれそうか?

A 分かり合えればね。

第一十六の罠に「風邪はいいものか?」

「つべちゅん!」「

「保崎さま? 咳ですか? 今まで熱だけでしたのに……」

「そ、そみみたい……」

ティッシュを取りながら、あたしはうなづく。

ソーダ事件から一日。すぐに着替えてお風呂に入ったものの、やっぱ風邪を引いたらしく……。

赤い顔は、恋とやらのせいでみなされついです……くわいちゃん!

「ほりほり、仮にも女人が鼻水たらすとはどうにか」とですか

なんだか暴言が聞こえた気がする。

しかし、このメイドは人の話を聞かないタイプらしく。ベットに入っているあたしを無理やり起こして、鼻にティッシュを当てる。

「はい、ずびー」

「…………」

冷めた目で、メイドを見る。

「どうしました? 保崎さま」

「ずびーはないでしょ?、ずびーはツ!」

「仕方のないことですね! ほら、抗わないでください、ティッシュがずれてしまします!」

ああもづーっ!

「治りましたッ！」

あたしはベットから飛び降り、服を着替える。

「保崎さまーー？」

「もひいこです、大丈夫です、お構いなく！」

大きな音を立ててドアを開め、あたしは部屋を後にした。

「…………ッ、なんだお前、どうし」

「ゴメン、レイ。かくまわせて」

その時、廊下から「保崎さまーーー？」といつ声が聞こえる。

「何したんだ、お前ーー？」

「何でもいいじゃん、あ、このクローゼットここ

有無を言わせずに、あたしはクローゼットの中にいる。

「おー、馬鹿出るッ！」

レイが腕を引っ張る。

そのまま見つかったら、クローゼットの中に何があると感づかる。

「ああもうーーー！」

レイの腕を、思いつきり引つ張った。

ぱんっー

「レイ様、保崎さまを知りませんか……あれ……？」

メイドの皿に映つたのは、きちんと整理整頓がされた、いつもの見慣れた部屋。

そこには、レイも秀名もいない。

「…………おかしいですね…………レイ様までいなとは…………」

首をひねりながらも、メイドが部屋のドアを閉めた。

「…………アホか――――ツー！」

数十秒後、クローゼットから飛び出したのは、レイと、秀名。

「勝手に人の部屋に押し込んで、何やつてんだ、アホ！」「いやだつてしまふ……」

「言ひ訳をするな、言い訳をツー。つたく…………そのクローゼットはアホやくひとり入れる大きさなんだぞ…………押し込んで……おし…………」

レイが顔を赤くする。

そんなに密着してたかなあ？

「まあ、ばれなかつたから結果オーライ

「よくないだろツー」

「つぬさい五月蠅い。じゃああたしはソレヒトアホのソレヒトヨウハ。

ちゅうとの間だからー

その途端、レイの顔がもつと赤く。

「……？　どうした　」

「へんなこと自分の部屋に戻れ――――」

押し出されました……。

Q 風邪はいいものか？

A、よくないっしょ……。

第一十七の罠に「まさか、惚れられたか……？」

「……つたく、追い出すなんてひどいよね。うん、ひどい。さすが冷血人間。つていうか誰かに愚痴りたいー！ 誰かー！」

悲観的な声を上げながら、あたしは廊下を歩いています。
あのメイドさんには見つかって、みっちりお説教されたよ！ レイのせいだ！

とにかく、風邪が治つたので、イライラしながら廊下を歩いています……！

「誰か……あたしの知り合ー……！」

その時。

「あ、秀名さん。」んにちはーー！」

語尾にオンプが付きそうな言葉を発してくる、ブロンズのツインテールメイド。

こいつは、ミルさんー！ あたしがくつけてやつた、もひとつも爆発してほしいリア充だ。
いいカモを見つけた、と表情に出してしまった。

「……そ、それでは失礼します」

お辞儀をし、すぐにその場を立ち去るうとするミルさん。
その手をがしりとつかみ、あたしは彼女の口を押えながら自分の部屋に引きずり込んだ。

「それって、惚れられたんじゃないですかー？」

嫌がっていたミルさんだが、さつきまでの態度が嘘のよひに楽しんでいる。

「こしても……惚れられたって……シ——！」

「言葉通りですよ。惚れられたんじゃないですか？」って

「でも、あいつはいつも通りに毒を吐いて、部屋から追い出したんだよ？ 好きな女性に行つ行為とは思えない」

「照れ隠しつてやつですよー。オトコロコロつて複雑怪奇ですしー」

あたしの反応を見て面白がったのか、ニヤリと意地の悪そうな笑みを浮かべて、ミルさんが言つ。

「で……でも……」

「もひ、いいんじやないですか？ 好きつてことでー。で？ 秀名さんほんなんですか？」

顔を近づけてきたミルさん。

きれいなブロンズの髪が、さうと揺れる。

「あ…………たし……？」

「そりですよーー！ 秀名さんほんレイ様のこと、ビビ思つてこらんですかー？」

あたしがレイのこと……シー？

うーん、頭の中に流れるのは、今までに言われた悪口集。

『お前にドレスなんか、もつたいないな。豚の着ぐるみでもよかつたんだぞ？ お似合いで』

『論外だ、論外。早く帰れ』

『それ以上太ると、屋敷が崩れそだからな』

「論外ですよおおつ！」

「わわ、どうしました？」

惚れるのも、惚れられるのも論外！

「ないないない、絶対ないです！」

首を振ったあたしに、びっくりしたミルさん。

「え……本当にないんですか……？」

「うん！ 断言する！ あたしとあいつに恋愛感情など生まれないと――！」

Q まさか、惚れられたか……？

A、ないないないないない――――――――――――――――――――――

第一十八の問い「“協力者”と書いて、何と読むんですか?」

「いやあ～……面白～」ことになつてきましたようだねエ～

秀名の部屋の外で立ち聞きをしているクロードの影。

その近くで、不思議そつた顔をしているショルがクロードの背中に立つかる。

「納得いかない」……あの容姿でよく攻略できるんですね……

「おやあ？ 第一のソウシ？」

「違う……ー」

叫ぼうとして、部屋に聞こえると思つたショルが、口をふせぐ。

「「」こつがねえ……意外にじやないですか

「そり？ そんな意外じやなかつたけどー」

「」やかな笑顔を見せたクロードに、シェルは怪訝そうな顔。

「兄様の考へていること、よくわかりません……」

「まあまあ。僕たちは応援役にでもまわつてあげよつじやないか

「応援つて……あの一人のですか……？」

「それもあるけどねエー。あと一人、ね」

何かをたくさんでいる悪戯っ子の瞳めをしたクロードが、ある部屋に向かつた。

Q “協力者”と書いて、何と読むんですか？

A、^{おせつかい}^{面白がっている}協力者、^{面白がっている}協力者と読む。

クロードが叩いたのは、ある人のドアだ。
ノックの音で誰が来たのかわかったのか、軽やかな「入ってくだ
さーい」という声がする。

語尾にハートマークをつけてもよさそうなその声に、シェルは顔
をしかめる。
隣のクロードは別に何も気にしていないのか、いつもの笑顔で部
屋に入る。

「どうしました？ お兄様」

例のメイド服に身を包んだ弟が、高価な椅子に座つて、麗しい笑
顔を向ける。

「いや？ 特にこれといったことではないんだけどねー」

そういうながら、クロードは弟 ソウシの正面に座る。
それを見たシェルが、警戒をしながらも兄の隣に座る。

「何か重大なことですか？ それとも、本当にこれといったことで
はないのですか？」

今日の髪^{ヴァイキング}の黒髪を垂らしながら、首をかしげるソウシ。
正直、そこいら辺の女子よりはかわいいだろう。

「あのね、男時のほうが話しやすいんだけど……」

少し動搖しながらクロードは頬み込む。

すると、しぶしぶだが、「お兄様がそつこつのなら……」と言つて、本棚の陰に隠れて着替え始める。

待つこと数十秒。メイクを落とし、服も着替えた男時の弟が現れた。

「…………それで……話といつのは…………」

自分の服装を顔をしかめ見おろしながら、ソウシが訊ねる。

「一方的な報告みたいなものなんだけどね。レイが、秀名ちゃんに惚れちゃつたみたいでー」

その途端。

「はあ……？」

空気が凍り付いた。

背後で、ぴきーんだかびきーんといつ音がするのを、ショルは確かに聞き取った。

「なんですか、それは……」

髪が上がりいかない弟のオーラに危機を感じたショルは、思わずクローデの腕を取り、退散した。

部屋の外に出ると、弟のホモツフリにあきれってきた。

「…………なんでそんなに怒れるんでしょうかね……あいつは……」「…………あいつがその時想い浮かべたのは、一体どっちなんだろうね」

自分の質問を無視してつぶやいたクロードに、シャルは首をかしげた。

第一十九の問い「まさかの関係ってなんですか？」

「あ
「あ

なんだか聞き覚えのあるようなセリフ。
つて、それより問題。ソウシにぱりたりとあつてしまつた。
しかも、元の姿で。男時

「……ど、どうしたの……？」

いつもならメイクの下に隠れて居るであつた男らしい顔つき。それでもやつぱり童顔の女顔に見えるが、何も言われずに女性か男性かと聞かれたら、迷わず男性というであつ。

服装だって紳士服だ。女装時のきらびやかなドレスしか見ていいから、違和感はあるが、普通のイケメンと言えるだらう。

そんな奴に少しどぎまきしながら聞くと、ソウシは唇を尖らせ、

「僕も一応男だからね。男性と会つ予定のなにときは、時々男になるんだ」すっぴん

「ふーん。……いつも女装なんてしなきゃいいのに。かつこいいよ
？」

あたしの言葉に、ソウシは顔を赤くする。

「よつ……、よくもまあそんな恥ずかしいことがいえるね……ツー

こつたいなぜそんな反応をするのかわからないが、とりあえず謝

つておーじ。

「え……？ ジ、ジめん？」

「もうじこよ、早くどっか行けー！」

え、なんかキレられた……？

まあいいや。ちょっとと図書館に行く予定だったし。早く帰つてこようとか思つていたし。

「じゃあねー」

わざと不機嫌そうな声をだし、あたしは図書館に向かつた。

「…………いや…………なんでだ…………？」

秀名が廊下の向こうに消えて行つたのを確認し、ソウシはへなへなつと、座り込んだ。

あのソーダ事件があつてから、どうもあいつといふと調子が狂う。自分ではなんだかわからなかつたが、さつき、クロードに言われた言葉で、妙な反応をしてしまつたことから、気が付いた。

…………認めたくないのだが。

「…………俺、意外と正直者なんだな…………」

男性が好きだと気が付いてから消え去つた一人称が出てきた。

女装時は一人称を「僕」にしているが、男時ではつい「俺」が出てきてしまう。

だが、今の人称は、明らかにあこつのかで出たのである。

「いや、そんなことない……あこつのかじゃない……自分の勝手で……」

つい何日か前はムカついていただけの相手。それが、こんな簡単に気持ちがひっくり返ってしまう。

「レイお兄様は……どう思つてこるんだ……？」

そんなことをつぶやいたのは、認めたからだと、思った。

Q まさかの関係つてなんですか？

A、いやあ……そりゃねエ……。

「お兄様。レイお兄様」

次の日の朝早く。ソウシは普通の姿でレイの部屋をノックした。朝早いのは、誰かに立ち聞きでもされたら困ると思ったからだ。

「……入つていいぞ……」

さすがのレイでも朝は弱いらしく。だるそうな声が聞こえる。だが、訪問者が警戒すべき相手だとわかったのか、ぴりぴりとした雰囲気が感じられた。

「入ります」

ゆっくりと、ソウシは部屋のドアを開けた。

第二十の問題「向やひに行きませぬかし……？」

「こんな朝早くから、どうしたんだ？」

レイが、男時のソウシを見て、目を見開く。
そんな反応を面白がりながら、ソウシは目的を思い出した。

「保崎 秀名のことです」

名前を出すだけで顔を赤くする兄の反応を見て、ソウシは確信した。

「その反応 やはり、お兄様は保崎 秀名のことが
「ちっ、違つッ！」

赤くなつた顔を隠すために後ろを向いたレイは、慌てて顔を抑え
る。

「断じて違う！俺はあんなオタクなんかに恋愛感情など
「ほほほらしていますよ。わかりやすいですね……」
「……仮に、仮にだぞ、俺があいつに特別な感情を持つていたとし
て、ソウシ お前はどう思うんだ？」

顔を抑えながら上田づかいにじちらをつかがうレイ。
前までなら完璧に襲つていたであらう。

「宣戦布告します」

今までの会話全スルーでソウシが切り上げた。

びしりと突き上げた、白く細い人差し指は、しっかりとレイをとらえている。

「……宣戦……？」

きょとんとした顔でこちらを見てくるレイ。ソウシは「くつとうなずき、指を下した。

「僕 いや、俺は、本気であいつを攻略する。恋敵ライバルがお兄様だろうか関係ない。……か、覚悟しどけよっ！」

初めて愛するお兄様に啖呵を切ったソウシは、語尾が震える。

「…………つてこいつが俺、あいつのこと好きなのか…………？」

「まだにわからないレイの一言が、嵐の去った後のよくな静かな部屋に響いた。

Q、何やつら雲行きは怪しい……？

A、…………あたし的には…………。

「なんだううか…………視線を感じる…………」

久しぶりにアシルさんの部屋に言つたあたしは、最近感じている妖しい視線のことについて相談してみた。

すると、アシルさんは眉間にしわを寄せ、真剣な表情をした。

「……それは大変だね……お屋敷に不審者が侵入でもしたのかな……あまり考えられないけど……でも万が一つことがあるし……お父様に相談しておこうか?」

なんだか久しぶりに聞いたようなまじめな返信に、あたしは感動して目を潤ませる。

「…………シ、ビうしたの?」

「いやあ、最近悪口しか言わない性悪人間しか相手にしていなかつたから、まともな意見を聞けたのに嬉しくて……」

あたし的にはものすごく感動したのに、アシルさんはプツと吹き出した。

な、なんてひどい反応……！

「ひどいです！ あたしは真剣なに……」

「「めん」「めん。……ふつ……」

もうおさまらなさそうなアシルさんにあたしは少し睨み、相談の内容に戻る。

「で……視線つて、なんだと思いますか?」

「……あれじゃない？ 秀吉ちゃんに惚れちゃった兄弟たち」

その答えに、あたしは吹き出す。

「ないないないですって！ そんなことあつたらあたしは美少女になりますよ！」

「たとえがよくわからないけど……考えられないか……」

少しショックを受けたようなアシルさん。自分の意見が外れたのがそんな悔しいか?

「じゃあ、ほかの考えは…………ない、ね」

少し聞をおいて断言したアシルさん、「あたしは小さく殴打ちをした。

第二十一 の罠に「協力者(?)」の存在明らかに?.....?

「おひこちゃん」

語尾に星がついてもおかしくない言葉を発したのは、シール。そしてその顔はレイのほつて向じている。

「なんだ」

つんつんとした言葉を返すと、つれないなあ、と歯を尖らせるシール。

「まあいいや。お兄様、保崎」

まだ言葉の先はあるの! レイはシールの口を押えた。
思わず反応に、びっくりするシール。

「なつ、なんですかお兄様!」

「あまりこんなところであいつの名前を出すなー。」

「こんなところって、廊下ですか?」

「廊下でも誰かが聞くことはありますんだよ」

ははーん、と笑うショル。

「そんなに聞かれたくないんですか? あいつのこと

「いや、ちぢみ、違う!」

もつばれでますけど、ところど、意外にあつせつレイは折れた。

「……で？　お前は俺に何がしたい」

横を向き、顔を赤くして言つ。シャルは懐から何かをとしだす。それに気が付いたレイは、思わず言つ。

「おい待て。何を取り出そうとしている」

「え？　カメラですけど」

そういういつつ慣れた手つきでカメラを取り出す。

慣れている手つき、とこりとはこれが初めてではないらしい。

「なぜ……なぜカメラ……」

もう答えはほぼわかっているが、一応聞いてみる。

「いや？　お兄様のそんな恥ずかしがつている顔、女性にはもちろん男性にも言い値で売れるかなあー？」と思つたものなので、「男性にも売れるってなんだあああ！」

とりあえず叫んで、カメラを没収しそうとする。
しかし。悪事的にはシャルのほうが一枚上手だ。するりとするりと攻撃をかわされ、ついにはシャッターを。。。

かしゃり。

切られた。

「……売れますね、売れますこれ！」

取れた画像を確認し、さらには画面をレイに向けどうかと聞いて

く。

「売れなくていい！ 消去しろ！」

「だあ、もうとらないでください！ これ結構高かつたんですから！」

またもや伸ばした手をするりとかわされる。

すると、シェルが「じゃあ、」と切り出してきた。

「保崎秀名攻略を手伝いますから、売らしてください」「
だめにきまつていいだろおおお！」

即答されたので、シェルはちえ、と舌打ち。

「まあ、本人の同意なしでも手伝いますし、この[写真だつて売りま
すがねー」

「さつきの約束意味なしかよ！」

走り出したシェルを追いかけ、レイはツッコんだ。

Q 協力者（？）の存在明らかに……？

A、本人は嫌がつてたけどね。

第三十一話 「紅茶のお供にいかがでしょ？」

「コイバナなら聞かないよ？」

「違う」

クロードの部屋に、レイがやってきた。

彼の片手には菓子折り（？）のクッキーのカンだ。

「まあ、座つてよ。何の用かな？」

田の前の椅子を手で指され、レイは座る。
椅子とセットのテーブルにクッキーのカンを置き、隣に置いてあ
つた紅茶のカップを上からのぞいてみる。
中身は入っていない。

「……飲みたい？」

「あ、まあ……」

「じゃあ、入れてくれるね。そのお話は、『Q 紅茶のお供にいかが
でしょ？』」

何もわかつていな様子のレイは、首をひねった。

Q 紅茶のお供にいかがでしょう？

A、あいつ、わかつてないみたいだけど……。

「ほー」と音を立ててカップに注がれる液体を見て、クロードが
切り出す。

「で？ 何の用？ レイが自分から訪ねてくるなんて珍しいね。僕がレイの部屋に行くのはよくあるけど」
「押しかけているだけですよね」

「まあまあ」

紅茶がカップにすべて注がれたので、クロードがレイのほうに差し出す。

「ありがとうござます」

湯気を立てている紅茶の熱さにしごきながらも、一口飲む。ストレートの紅茶はあまり飲んでいなかつたが、ミルクを入れるよつもおこしいと思つた。

「それで、そろそろ話し始めてほしんなあー。」など」とベスルーセてるからー」

自分もカップを持ったクロードが、にこりとしている。

「あ……コイバナ……？ 的な話ですが」

最初に断られた話題だったので控えめに言つと、以外にもクロードは笑顔で聞く体勢に入った。

「保崎秀名……って、どうやつたら攻略できるかと思いますか？」
「知らないー」

そつけない態度で返されたので、レイは思わず紅茶を吹き出した。

「……えつ！？　お兄様のことだから、『ああ、いいよ。』まずは夜と一緒に過ごす『やうね』くらいは言われる覚悟だったんですけど……」

「言われたら君はびっくりする気だつたんだよ……っていうか、僕はそこまで協力しないよ。自分で考えなさい」

そつけない態度のクロードに、レイは上目づかいで聞く。

「ど、どうしてですか……？」

「まあ、ぼくもシェル君に協力者になろうと相談したけどね。そこまで協力はしない。僕がする範囲は、恋文ラブレターを渡したり、偶然を装い二人を合わせるぐらいだよ。そこら辺の境界線、わかってる？」

問い合わせたクロードに、レイはふるふると首を振った。

「どうやら、彼にはまだ早い話だつたらしい。」

「……経験値、君低いんだつたよね……」

ため息をついたクロードの紅茶に、レイは慌てておかわりを注いだ。

第二回「紅茶のお供いかがでしょ?」(後書き)

最近、兄のせいでPCの使用時間が三十分～一時間になっています
なので、更新はまばらになると思います。;

第三十一の問い「女装男子と冷血人間は好き?」（前書き）

ウェブ拍手のお礼ページに、たまにですが秀名のイラストが出てきます^ ^ ;

絵は私が書いたのでうまさは保証できません

第三十一話 「女装男子と冷血人間は好き？」

「久しぶりにやつてきました秀名一人称の回一つ！」

自分の部屋のベットの上で、あたしは「ぶしがりと突き上げた。
もう何回ぶり？ 一回三人称でやつて、あ、行けんじゅん的なりで何回やつたんだよ、作者！！

とにかく、自分のターンが回ってきたみたいでうれしいです、マジで！

「ああー、久しぶりすぎて自分のキャラ見失った！ ビジしてくれるのよ作者～」

語尾の上がつたセリフを言つあたし、もはやテンションハイだー！

……いや……。

「…………」

あたしは急にドアのほうを振り向く。
しばらくやうしたうが、何も起きないのを確認し、ほつと胸をなでおろす。

「いつもなら」うしてあたしが変な行動をしたときに誰かが入ってくるんだよね、レディのお部屋なんだからノックくらいしてほしいんだけど」

ぶつぶつと文句を言つてると、ちょんちょん、と肩をたたかれた。

……ハジの作者は……毎度毎度同じパターンで……。

「はこー?」

思いつきつ嫌そつな声を発したあたしは、後ろを振り向く。すると。

ふにゅう。

「はははー、引っかかったー」

ほっぺに指が突き刺さる。

あたしが睨んだ先には、クロード。

へへへー、とでも言いたげなその顔に、あたしは仏頂面。

「…………何の用ですか…………?」

「やだなー、デートの時間を削つて来てやつたとこー。秀名
ちゃん、まさかシンテレ? はたまた冷血キャラ?」

「両方違いますッ! あたしはただのオタクです!」

オタクを堂々と云うかなー? と腕を組みながら苦笑いしたクロードに、あたしは言ひついです、と反撃。

「とにかく、用がないなら帰つてくださいよー。あたしも酔じやないんですよ」

ぐごごごとクロードさんの背中を押しながら文句を言ひつ。すると、クロードさんがドアの陰に向かって、

「だつてよ?」

「……？」

長身のクロードさんの後ろから、つま先立ちになつてその先を見る。

すると、そこには何やら一人の人物。

「…………レイ……？ ソウシ……？」

不機嫌そうな顔で床をにらみつけるソウシと、今にも逃げようとするレイ。

ありそつでなかつた組み合わせに、あたしはきょとんとする。

「どうしたの？ まさか頭撃つた？ それとも乙女ゲーやりたいの？」

「なんでそんな考えにつくかなー…………？ ただお話に来ただけだよー。きつと」

不自然に“きつと”を強調したクロード。

そしてそのまま逃げるよう走つて行つた。

「…………？」

何をしに来たのか目的が全く分からぬあたしは、ただその場に立ちすくしているだけだった……。

……それは、あの一人も同じだつたけど……。

Q 女装男子と冷血人間は好き？

A、
……それ、答
えなきやダメ？

第二十四回の題で「この雰囲気、何とかなりませんかね……？」

前回までのお話つ！

あたしの部屋に、急に女たらしの長男がやってきて、あたしをからかつた後、冷血人間の三男と女装男子の六男を置いて、自分はさつさと帰りやがったよ！

さてさて、残されたあたしたちはどうするのか……。

「……つて、やつてらんないわよー。」

突然怒り出したあたしに、一人はびくつとする。

「ど、どうし！」

「ありえない、ジル君とかアシルさんとか、結構話が保つ……いや、仲がいいヒトだつたらともかく、なんでこの一人！？ 嫌がらせの上でのこの組み合わせ！？」

「そんなにキレても仕方がないし、とにかく部屋に上がらせたよ。これはレイお兄様も思つていると思つよ！」

「誰が入れるか。部屋にマングース入れると一緒だよ！」

「こんなにかわいい『マンガース』にいるんだよ！ ……あ、今女装していないんだつた」

自分の服を見おろし、少し残念そうに言つソウシ。

そんなに男時がかっこよくないわけでもないし、なんで残念そうなんだろう……？

ソウシがパッケージにいる『女ゲー』は絶対買つね、うん。

「おじ自分を乙女ゲーのキャラクターに例えられたぞつ！ それはさすがにうれしくない！」

「いいじやん、あたしにとつての最高の褒め言葉」「うそだろそれ！ 視線泳いでるぞお前！ クロールでもしてみるか！？」

「いいよいいよ、クロール」

ゆらゆらと特殊な目動きをする。いい出来だと思ったけど、睨まれる。

「ふざけてるのか……？」

「お前に頼まれてやつたんじやん、元凶はソウシー。」

「……あのー……ちょっとといいか？」

突然手を上げたレイ。

……ちょっとと存在忘れてた。

「そういうえば、レイって最近冷血人間つていうより、空回りしてるかわいそうなキャラに成り上がったよね」

「それは成り下がったといつ」

「そりかなー……？」

楽しそうに（少なくともあたしは）会話をするあたしとレイ、ソウシはふきげんそうな顔。

「……保崎 秀名。部屋に上がらせてよ

「うぐひ……。つこに来たよ……。

「まあいいよ……その代り早く帰つてね」

ため息をつきながら、あたしは部屋の中に入った。

そのあとから、一人が申し訳ないといつ感情を見せせずじてくる。

……応部屋の中に女子といるんだし、わよつとびりこまじわも
きしてくれたつていいんぢやない？

「…………わつー？」

そんなことを思つてゐると、レイがちょっとの段差に躓く。
すてーんと、確かにそんな音がして、頭から落下。

……こんな」と言つてこゝのかわからぬけど……ダサイ。

「レイ…………」

一気に空氣がシラケた…………。

あたしはとりあえず、レイに手を差し伸べ、立ち上がる手助け。

「…………あ、ありがと…………」

その時、隣から手が伸びてきて、レイが少しだけ伸ばした手をチ
ヨップ。

…………痛そう…………。

「レイお兄様？ 大丈夫ですか？」

そういうで、ソウシは自分の手を差し伸べる。

愛しのお兄様にあたしを触らせない的な考え方……でも、だつたらあたしの手にチヨップするでしょ。なぜレイにチヨップ……？

「あ、ああ……平氣だ」

ソウシの手を借りずに立ち上がるレイ。
そして、あたしのほうを振り向く、

「ありがと
「レイお兄様？」

お礼を言つ前にソウシに邪魔をされる。

お前ッ……！ と絞りだすような声で怒るレイ。

「あのー……？ 完璧に空氣悪くなりましたよねー……？」

Q この雰囲気、何とかなりませんかねー……？

A、もつ無理だ。

間に火花を散らすレイとソウシ。

その一人を見ていたら、なんだか氣づかぬうちに頭を抱えていました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7429x/>

Q、異世界で逆ハーレムは成立するのか？

2011年12月17日19時48分発行